

幻想物語寄稿集

GENSOU * ROMAN * KIKOU * SHU



幻想物語寄稿集

GENSOU 'ROMAN' KIKOU - SHU

目次

3度目のマッドパーティー／はーしえん	6
ビリーブ・ガールズ／満足ひろpon	34
幻想の旅人／桶住人のmist	60
A girl has nine lives／卯月秋千	90
標／みずなみ	116

幻想物語寄稿集

GENSOU 'ROMAN' KIKOU - SHU

3度目のマッドパーティー

原曲
著

マッドパーティー
はーしえん



——どうして、僕はこんなところで座っているのだろう。

しんと静まり返った洋室で、椅子に腰掛けた青年が一人、ふと自問した。

答へは、普通ならば敢えて問ひ直すまでもない。なのに、どうして、自分がここに居るのか……それがどうしても上手く思い出せない。

まるで記憶の抽斗ひきだしに、鍵が掛かっているようだった。

とりあえず座ったまま、辺りを見回してみる。部屋の出入口は彼の後方に一つと前方左手側に一つで、扉は閉ざされている。明かりは点いているものの窓が無いせいか、妙に薄暗い。広さは、ちよつとしたパーティーが出来る程はある。

目の前にあるのは、白いクロスが掛かったテーブルが一卓、そして背と座面に柔らかなクッションを設えた座り心地の良い木製の椅子が、自分が座っているのも含めて二脚。テーブルは長方形で一〇人くらいは掛けられるものであり、その上には何も置かれていない。椅子はテーブルの短辺側にそれぞれ一脚ずつ向かい合うように配置されている。

テーブルセット以外には、床にカーペットが敷かれているくらいで特に物らしい物は見当たらない。それは酷く殺風景で生活感がなく、彼に不気味な印象を与えた。

こんな部屋を過去に訪れたという記憶は、彼には無い。思い出せないのではなく、無いんだと直感した。知らない場所で、たった一人。お化けを怖がるような歳ではないが、それを認識してしまったが最後、小さな不安は加速度的に増してゆき、彼を侵蝕していく。冷や汗が一筋、うなじを伝った。不安に押し潰されてしまわないよう、どうにか何かを思い出そうと必至に唸ってみるが、やはり思い出せず全く気は紛れない。

まるでさっきまで深く眠っていたかのように、思考回路が立ち上がってくれない。

ということは素直に考えると、僕はついさっきまで、本当にずっと眠らされていたのだろうか。だからまだ、頭が目覚めてなくて……と、ここまで考えて、それだけは無いなと思ひ直した。自分が寝ていたかどうかなんて、こんな状態でも流石に間違うものか。

……そうだ、僕は眠ってなどいなかった。その気付きが、小さな抽斗を一つ開いた。改めて確認するまでもない当たり前のことなのだが、それでも一つ、自分の事を思い出せた事には違いない。つられて、徐々にクリアになっていく思考。この調子で少しずつ、記憶の鍵を見つけていこう。そうすれば何れ、ここに居る理由にも辿り着くはずだ。

そういうえば先程から、座らされて、眠らされて、と受動態で考えている事に僅かな違和感を覚える。これも記憶の鍵か？ と気付いたとき、また、かちやり、と音がした。

そうだ、僕はあの子に——館から出てきた少女に案内されて、ここに来たんだ。かちやり。

ここはそう、館だ。僕が森の中を歩いていたとき、突然目の前に現れた見知らぬ洋館。あまりにも場違いなその佇まいに思わず見とれていたら、少女が現れたんだ。

かちやり。かちやり。かちやり。

僕を招いた少女は、こう言っていた。「暖かい飲み物をお持ちします」と。それまでここに座って待っているように、と。

……かちやり。

だから僕は、一人でこうして座っているんだ。

記憶の抽斗は鍵同士が連動しているかのよう、次々と開かれていく。ここに居る理由の直接的原因は、概ね思い出す事が出来たように思う。

しかしこれだけでは、どうにも腑に落ちない。本当の問題は、そもそも何故彼は森の中を一人で歩いていたのか、その理由にあるのではないか。

それが仕舞われている抽斗は、もう目の前にある。しかしこの抽斗だけ何故か、幾重もの鎖が固く巻き付いていて、開けられそうにもない。

ならば、アプローチを変えてみよう。少女は何故、見ず知らずであろう彼を館に招き入れたのか。恐らく相応の理由があり、それが彼の理由に繋がっているかもしれない。

少女の視点になって考える。ここが少女の家と仮定して、見知らぬ男が一人、家の前で惚けた顔をしてたら怪しさ極まりない。普通に考えれば、警戒して直接声を掛けに行くなんて事はしないだろう。少女が、とても純真で親切心に溢れる子でもない限りは。

じゃあもしそうだとして、僕が困っていると思つて声を掛けてくれたのだろうか。例えば、僕が道に迷つているように見えたとか、そんな理由で？

——その思考に至つた瞬間、ぐらり、と世界が揺れた。

頭の中で何かがフラッシュバックし、強烈な目眩が彼を襲う。現在の視界と過去の幻視フレイションが同時に映し出され、二重にブレて混じり合う。小さな丸いテーブル。キャンデイの瓶。傍ドブの扉から聞こえる物音。ここではない何処かの光景が重なりゆく。

視覚の矛盾。場所の矛盾。時間の矛盾。記憶の矛盾。

分らないが、これはきつと、既視感デジャヴなんだろう。

何も思い出せないこの場所を、理性は知らないと判断した。だが、見たこともない筈のものを幻視ミせられた事で、知つていふ感覚が理性を上書きしていく。

今までの小さな違和感は、小さな記憶の抽斗の鍵だった。この既視感も、恐らく鍵であろう。これを見逃してはならないと、本能が告げている。だが同時に、思い出すことを拒むかのような目眩は治まらず、嘔吐感が込み上げてくる。これ以上、無理に考える事は出来ない。一度、落ち着かなければ……。

これではもはや、思考の袋小路。手詰まり。お手上げだった。

「お待たせ致しました」

目眩が治まつてきた頃、部屋の奥の暗がりから件の少女が現れた。その手には、銀のトレイに乗せたティーセット。品のある磁器のカップを彼の前に配し、透明な硝子のティーポットから紅茶を注ぐ。甘く華やかな、薔薇に似た香りがふわりと立ち昇った。

「あ、ありがとうございます。何だかすみません、突然お邪魔したのに」

平静を装って、礼を述べる。少女の真意が分からないうちは、自分の今の状態は伏せ、少しずつ反応を伺うしかない。慎重にいこう。

「そんな、お気になさらず。私が好きでやっている事ですのぞ」

少女は、にこやかに応えた。その様子に、違和感は何も無い。となると余計に彼を招き

入れた理由が、持て成しを受けている理由が分からない。

「……えっと、すみません。変な事をお聞きしますが、僕はもしかして貴女に以前お会いしたことがあったでしょうか……?」

慎重に、と思った傍から不自然だったかと、言ってしまったから後悔する。気持ちが逸り、つい踏み込んだ質問をしてしまった。

「いえ、今日が初対面のはずですよ。さあ、冷めないうちに、どうぞ」

薔薇の模様が描かれたシュガーポットを置きながら、少女はあっさりところう答えた。不審がられはしなかったものの、これでは進展も無い。

焦り過ぎているかもしれない。次に少女に聞く事を考える前に、折角淹れて貰ったものを無碍にするのも悪い、紅茶を飲んで落ち着こう。こんなにも良い香りだ、きつと質の良い茶葉を使っているのだろう。彼は角砂糖をカップに二つ溶かし、熱い紅茶を啜った。

「これは……とても美味しいです。紅茶は人並みには嗜んでおりますが、こんなに美味しいものは久しぶりです。淹れ方、お上手なんですわ」

「うふふ、喜んで頂けて何よりですわ」

お互い朗らかに、微笑みながらの遣り取り。さつきまで、紅茶に毒でも入っているんじゃない

ないかとばかりに警戒していた彼の心も、徐々に解れてゆく。

しかしここで聡い彼は、新たな違和感に気付いてしまった。

……毒？ 毒だつて？ どうして、そんな事が今、頭に浮かんだんだ。

再び、世界が揺れる。先程と同じ、けれどより一層烈しい目眩。重なる過去。繋がる意識。毒が幻視^みえる。毒蛇。毒蜘蛛。毒茸。毒蜥蜴に毒蠍。大釜の中で、紫の色をしている。あまりの禍々しい幻視^{ワジコシ}に、激しく嘔吐^{え吐}き、手にしていたカップを落としてしまった。

「あら、大丈夫ですか……？ なんだか、お顔が真っ青ですよ」

割れたカップを拾いつつ彼を気遣う様は、相変わらず親切な少女のまま。しかし彼の目には全く別の、何か悍ましい存在が、少女に重なる。ここに居てはならないと、本能が警鐘を鳴らしている。

「え、ええ、なんとか……。すみません、こんな調子じゃ御迷惑だと思えますので、もうお暇しようかと……。カップは後日、必ず弁償致しますので」

逃げ出すなら、これが最後の機会^{チャンス}だ。必死に足に力を込め、椅子から立ち上がる。

「まあまあ、そう慌てずにお掛けになって。そんなふらふらの状態で、お一人で帰す訳にはいきませんわ。うふふふ……」

何時の間にか彼の背後に回っていた少女が、立とうとする彼の肩を、とんと押し、と膝が崩れ、また椅子の上に戻される。

「いえ、あの、本当にお構いな……く……く……？」

ブレていた視界が歪み、霞んでゆく。頭が呆けて、また何も考えられなくなってゆく。瞬きする度に重くなる。意識の消失に抗えず、終には閉ざされた暗闇の中で、眠気とは違う、魂が引き剥がされるような浮遊感だけが彼を支配する。

幻も現も一緒くたに、夢の中へと溶けてゆく。

「ああ……やつ、ぱり……こ、うちゃ……に……ど、く……」

掠れた声を振り絞る。振り返る力は、もう残っていない。

少女は、背後から抱き締めるように両の手を回し、彼の頬を撫でた。

「ごゆっくり、おやすみなさい」

耳元で、小さく囁く声。それは、どこか慈しみさえ帯びた声色で——



彼が目を覚ますと、殺風景だった部屋の様子は一変していた。

真上には煤けたシャンデリア。壁には朽ちかけた木の本棚。そのあちこちには、蜘蛛の巣。本棚に納まるべき本は椅子や床の上に乱雑に積まれ、何れも一目して呪わしげで禍々しいと理解する。床に散らばった幾つかの本は頁が開いており、その上を奇怪な魔法陣がぐるぐるとひとりで動きながら、ぼう、と妖しく蒼く光っている。驚くことにその中には、勝手に宙に浮いているものも散見される。

反対の壁には、煉瓦の暖炉と竈。炎は煌々と、薪も無いのに燃え続ける。竈の炎にかけられた大釜は名状し難き毒汁を並々と湛え、ぐつり、ぐつりと煮え立つ泡が絶え間なく弾けている。その周りには、ついさつき幻視した種々の毒物達が無造作に盛られ、釜にくべられるのを待っている。その一部が蠢いた気がして、怖気がした彼は視線を逸らした。

正面のテーブルの上には、何も置かれていない。惨状とも言えるこの部屋の中で、ここだけ糊の利いた白いクロスが綺麗にセットされているせいで、結果として全体の異様さをより際立たせていた。

(やっぱりここは、あの恐ろしい魔女の館だったんだ……)

気付いても、もはや手遅れ。彼の体はぴくりとも動かせず、声を出す事すら出来ない。

辛うじて視線は動かせるが、その所為で如何にも恐ろしげに変貌した部屋を見せつけられることになり、却って彼の恐怖を煽る。

絶望の記憶が、徐々に蘇る。邪悪な魔女に囚われ、食台に捧げられ、終には死を覚悟した——あの時の記憶が。愚かにも、彼はまた繰り返してしまったのだ。自分を責めても、こうなつてはもう、逃げる事は出来ない。

しかし、ここで彼は一つ大事なことを思い出した。

(……また？ あれ、そういえば、あの時、僕は最後に……)

「よう。遅いお目覚めだな。待ちくたびれたぜ」

さつきまで気配も無かつた後方から、突然声が掛けられた。驚き、視線をそちらに向けるとそこには、あの時と寸分違わぬ姿の少女が居た。

金の瞳に、金の髪。頭には不釣り合いな、大きく黒い三角帽。如何にも、な格好のこの少女こそが、彼が遭つた「魔女」に相違無く。魔女は彼を見下ろし、不敵に嗤つた。

「そういうえば、自己紹介がまだだったな。私は霧雨魔理沙。普通の……いや、邪悪な魔女と名乗るべきかな？」

(霧雨……？ 霧雨つてもしかして、霧雨店の!?)

「……ほう、私の事を知ってるのか。その話も聞きたいが、まずはお前の無様な喚き声を聞かせてもらおうかな、ククク」

魔法の力なのか、声を出せずとも魔女には彼の思ったことが伝わるようだ。

しかし、まさか彼女が例の霧雨の娘だったのか。霧雨といえば、人里では知らぬ者の居ない程に大手の道具店、霧雨店を営む家だ。彼の父は里の流通をほぼ一手に担う大商人で、実家には霧雨店を始め、付き合ひのある商売人が入れ替わり立ち替わり訪れた。そんな環境で育ったから、少し踏み入った話を、偶然、耳にする機会もあった。例えば、霧雨店には勘当された娘が居るらしい、とか、そんな噂話を。

(また僕を脅かそうっていうんですか。もう、貴女の手口は分かっています。二度も住処を侵した事は謝りますから、この拘束を解いて下さい……!)

魔女だ、なんて言ってるけど、彼女は歴とした人間の筈だ。何も恐くない。大丈夫。

絶体絶命のこの状況の中で、彼はどこか余裕さえ伺わせながら、強気に魔女と対峙する。それもその筈。彼はあの時の顛末を、ちゃんと思ひ出したのだから。魔女に散々脅かされるも、結局、無事に里に帰り遂せたという、その事実を。

「あー？ 何を勘違いしてるんだ、お前は」

しかし魔女は、そんな彼の姿がさも可笑しくてたまらないという風に、話を続ける。

「私は警告したよな、次はほんとに喰われちゃうぜ？ ってさ」

（だ、だから軽率だったと、反省してます……。一步間違えば妖怪や獣に喰われていたと、もう森には金輪際近寄ってはいけないと分かりましたから、早く拘束を……）

「ククク……アツハツハツハ！！ そうじゃない、もう、そういう話じゃあないんだ。拘束を解く？ 可笑しな事を言うもんだ。私は最初から、お前を拘束なんかしちやいないぜ。なのにお前は身動き一つ取れない。何故だか分かるか？ 分からんよなあ……。ククク！」

（え……それは一体、どういう……？）

魔女はたじろぐ彼を嗤いながら、最初の絶望を告げる。

「つまり、お前の身体そのみは、とつくに食台に献上されてるって事さ！」

魔女が右手を掲げ、パチン、と、指を鳴らす。その指先から放たれた魔法は、世界を白く染め上げた。一瞬の後、閃光は収束する。すると、今まで何も無かったはずの卓上に突然、ステーキ、カツレツ、ハンバーグ、シチューにスープ、ミートパイ、生ハムサラダにソーセージ、等々……何れ劣らぬ豪華な洋食料理の数々が現れたではないか。

(う、うわあッ!! 何だこれ……何なんだこれは!!)

突然の出来事に、彼はただ喚き散らす事しか出来ない。目の前には美味しそうに湯気を立てる大皿の料理がテーブルを埋め尽くさんばかりに並び、宛ら晚餐会だ。平時なら心踊るような御馳走も、今の彼には余りにも残酷すぎる現実を突き付けるものとなる。

何故なら、数々の料理は全て肉料理である事に、聡い彼は気付いてしまったから。

「驚くにはまだ早い。宴はもつと盛大でなくちやな。さあ、スペシャルゲストの登場だ!」
これ以上何の追い打ちがあるというのか。もう、やめてくれ……と嘆願する彼を無視して、魔女は容赦なく更なる魔法を解き放つ。

すると、誰も居ない彼の正面の席が光に包まれ、中から一組の男女が現れた。男は黒いタキシード、女はパープルのドレスを身に纏っており、何れも品の良い招待客といった風貌だ。ただし兩人共に瞳は昏く、糸が切れた人形のように力なく項垂れていた。

(に、兄さん! それに、義姉さんまで!)

魔女によって喚ばれたのは、彼の実の兄と、その妻である義姉であった。彼は必死に叫んで自分の存在を伝えようとするが、やはり声を上げることは出来ない。

「ようこそ、お出で下さいました。お二人を歓迎致しますわ」

猫を被った口調で、魔女が挨拶する。二人共、逃げてくれ！ と何度心の内なかで叫んでも、心の声など兄夫妻には伝わりようもなく。

「こちらこそ、素敵なパーティーにお招き預かり光栄です」

「どのお料理も美味しそう……。本当に、夢のようです」

夫妻は魔女の声に呼応するように、顔を上げてぎこちなく話します。魔女に何かかされたのは明らかで、これでは例え声が出せても、彼の言葉が届いたか分からないだろう。

「お喜び頂き、主催冥利に尽きますわ。それではどうぞ、グラスをお手に」

兄夫妻がワイングラスを掲ぐ。そのグラスに満つるは、玲瓏に輝く白い葡萄酒ワイน์。

魔女の宴マッドパーティーの舞台装置しゅうたいさくちは、これで全て整った。

「心を尽くした晩餐です。ごゆっくり、お楽しみください」

魔女がすいと手で促すと、二人はグラスを軽く合わせ、乾杯する。そしてお互い全く同じ動作でグラスを口に運び、同じ角度で傾け、同じ量を口に含み、飲み込んだ。

——ごくり。と、二人の喉が、同時に鳴る。

——ぞくり。その瞬間、彼に強い刺激が稲妻のように迸る。純粹で鮮烈な、今まで経験したこともない感覚。動かせぬ体では、悶える事も許されない。そして直後、ずっしりと

重い疲労感が一瞬にして彼に押し掛かった。

(今の感覚は一体……。僕の身体に、何をしたんですか……！)

(さてね、ククク……)

魔女は意味深に、声無く嗤う。彼が追及しようとした矢先、兄が口を開いた。

「この葡萄酒は不思議ですね。優等生な味ですがそれだけではなく、郷愁に誘われるような、そんな飲み口です。何故かふと……そう、弟との昔の事を憶い出しました」

「あら、弟さんが居らっしゃるのですね。宜しければお話、聞かせて下さいな」
すると兄は徐ろに、昔話をし始めた——

幻想郷の人里。その名士である大商人の家の次男として、彼は産まれた。

彼の兄は、完璧だった。両親の愛情を一身に受け育ち、跡取りとしての期待を背負わされて尚それに十二分に応える優秀さを備えていた。品行方正。文武両道。まだ子供ながらに父の仕事も次々と覚え、時には大きな取引現場にも立ち会うことも許された。家督を継ぐに相応しいと、誰もが認める存在だった。

大き過ぎる存在は、大き過ぎる陰を生む。彼は不出来な弟だった訳ではない。むしろ、

学業は常に優秀で、コミュニケーション力にも長け、父の手伝いを積極的に買って出ては良く働いたものだった。だがそれらも全て、出来過ぎた兄の前では霞んで消える。

どんなに試験の成績が良くても、どんなに仕事で成果を挙げて、彼は両親に褒められた事など、終ぞ無かった。褒めてほしい、認められたい、という想いは、純粹さを失い徐々に濁り、歪んでいく。自分の頑張りで見返すよりも、兄の足を引っ張る方向へ、捻れていく。しかし優秀な兄は生半可な工作など物ともせず、彼は陰の存在のままだった。

そして、Xデーは訪れる。里の要人が一堂に会する重要な例会の場で、元服を迎えた兄を正式な次代当主として御披露する事が決まった。もしその当日、兄が何時まで経つてもその場に現れなければ、代わりに僕が次代当主に指名されるに違いないんだ！ という兄を出し抜く何とも幼稚な秘策に、事前に気付ける者は誰も居なかった。

彼は兄の食事に薬を盛り、眠ったところを蔵に運び、外から門を掛けて閉じ込めてしまった。時間になつても現れない兄に苛つく父親と、ざわつく会場。思惑通りの展開に、彼はしめしめとほくそ笑む。

だが、兄が来ないなら弟を代わりに、なんて事にはなるはずもなく。事の顛末を知った父は怒り心頭。兄と入れ代わりに彼が、蔵へと閉じ込められる事となった――

「弟への仕置きは、三日三晩続きました。そして、衰弱しきつた弟が女中によって助け出されても、面目を潰された父の怒りは収まりませんでした」

父が下した彼への処分は、使用人が住まう離れの屋敷で、これから一生暮らすこと。それは家の汚点である次男を世間から隠す軟禁であり、事実上の勘当でもあった。

（確かに、あの時のやり方は稚拙で、どうしようもなく軽率だったと思う。けれど僕の、僕だけが秘めた野望は、何も間違つちやいなかった……！）

一方的に過去を暴かれた彼は、言い訳がましく自己を肯定する。

（ふーん。そんな野望おぼなんて、至極、有触れたものなんだがな。言うなれば、普通だぜ）
（なっ……!?!）

魔女は、そんな彼の言葉を一笑に付す。そして今度は、義姉の方に目を向けた。

「ときに、先程から奥様の食べっぷりが素敵ですね。惚れ惚れしますわ」

兄が話している最中も、義姉は黙々と食事をし続けていた。ナイフとフォークを器用に使い肉厚のステーキを切り分け、赤みを帯びた断面から滴る肉汁の一滴も溢すまいと、その肉塊を口に頬張る。それを飲み込むか否かのうちに食器をスプーンに持ち替えると、挽肉入りのミネストローネを並々とよそい、その赤い水面に口吻をした。

義姉が料理を食す姿を見る度に渦巻く、どろりと濁るような感覚。それはどこか劣情にも似ていて、彼を困惑させた。

「あら、お見苦しい所を……。お料理がすごく美味しいのと、お腹の子のためにも、沢山食べなければなりませんので、つい」

そう言うとき義姉は、空いた左手で大きなお腹を擦った。

「そういえば……。私も一つ、義弟との事を憶い出しました。今となっては過ぎた事なので、あまり蒸し返すべきではない類の話なのですが」

「そのようなお話こそ、興味が御座いますわ。是非お願いします」

兄に続いて、今度は義姉の口から昔話が紡がれる――

義姉は、可憐で清楚な女性だった。

彼が彼女と出逢ったのは、仕事の手伝いで旧家の御屋敷へ荷物を届けに行った時だった。夏のかんかん照りの日、荷を解いてすぐ次の現場へ向かおうとする彼を引き止めて、よく冷えた麦茶と西瓜を御馳走してくれた女性。その月のような優しさと、はにかむ笑顔に、彼は一目惚れしてしまったのだ。

それから彼は、彼女の家へと足繁く通った。彼を出迎える彼女はいつも笑顔で、他愛無い話にも面白そうに笑ってくれた。ある時期から彼女が彼の家を度々訪ねてくるようになり始め、逢える機会が増えたと喜んだ。理由は知らぬが、この時の彼には些末事だった。

そして彼の命運を別つ事となつた例会の日、その真実を知る事となる。父がその場で発表しようとしていた事は、実は跡継ぎの件と兄の婚約の件の二つだったのだ。その婚約相手こそが、彼の想い人——月のように優しい彼女、その人だった。

父に蔵へと閉じ込められる刹那、閉じゆく戸の隙間から見えた、月のように優しかった彼女の氷のように冷たい瞳は、忘れることなど出来ようものか。家族から断絶され、壁の向こうから眺める彼女の笑顔は、もう二度と、彼に向けられる事はない。

淡い初恋は、これでお終い……だなんて諦められるほど、彼は大人ではなかつた。もう彼には、彼女しか、無かつたのだ。軟禁され、抑圧された日々の中で積もつてゆく彼女への想いは、次第に瀝青のようになどす黒く濁り、彼自身を侵していった。

それから季節が幾度か廻り、彼女が大人になって、とうとう兄との挙式が執り行われる日の前夜。彼女が静かな寢息を立てる間に、忍び寄る影が一つ。

明日には兄の所有物になる彼女も、今はまだ唯の、か弱き婦女子。

手に入らぬならば、奪えばいい。想いに侵されるままに、犯せばいい。

宵闇の中で醜き生物が一匹、衝動に身を委ねた——

「……義弟に襲われかけた時、私は怖ろしくて声も出せませんでした。でも夫が、物音を聞いて飛び起きて来てくれたのです。本当に、間一髪でした」

（そして僕は、逃げ出した。逃げて、逃げて、逃げ疲れて、自分の中に棲む獣の怖ろしさに絶望して、どうしようもなくなつて。……死に場所を求めて、森に入ったんだ）

罪を独白する彼の悲壮感とは対照的に、魔女は退屈そうに言う。

（そんなものは別に、不思議でも何でもない、良くある欲望の果てだぜ。その「原感情」に抗える奴なんざ、そうは居ないさ）

（……………）

もしそうであるならば、自分の望みとは、人生とは一体何だったのか。彼は齒齧みするが、しかし、何も言い返せない。

「まあいい。次は漸くお待ちかねの、お前の話を聞く番だ。私の壮大なる魔女的計画の感想をお前の口から直接聞くのも一興だが、今はその先の話を是非聞かせてくれよ」

僕が話す番だつて？ 人の事を散々勝手に、きつと魔法の類を使って聞き出しておいて。この期に及んで何をさせる気なんだ。と、彼は身構えた。

(……やめてくれ、この話はお終いだ！ 僕から話す事なんて、もう何も)

「無い、とは言わせないぜ。まさかすっかり死ぬ気が失せたからつて、何食わぬ顔でお家に帰りました、なんて事はないんだろう？」

魔女が、彼の心の叫びを遮る。そして彼の心の玄関の鍵を、乱暴に抉じ開ける。

確かに、彼はもう家には帰れなかった。人目を避け、こそそと逃げ隠れるようにして辿り着いたのは、落人街。犯罪者、障害者、中には邪術に手を染め追われた者まで。ワケ有りの住人が自然に寄り集まったそこは、人里の暗部。この中では、一切の過去が等しく無価値だ。彼はそこで砂を噛み泥を嚼つてでも、生きていかねばならない。

これこそが自分の受けた罰であり、そして禊であると思っていた。たった今、義姉も過ぎた事だと言ってくれたし、兄もそういうことを何時までも恨むような人ではない。だが彼の勝手な希いとは裏腹に、兄夫妻は冥い瞳で、彼を責め立てるように見つめていた。

(どうしてそんな、恨みがましく僕を視るんだ……やめ、ろ……)

頭痛にも似た、痛みが増す。魔女は心の奥へと、土足で踏み込んでゆく。

「……ふむ。最初は寝処さえままならなかったけども、掻き集めた元手で何とか商売を始めてそれなりに慎ましく暮らしていた、と。なるほど。助かったな、商人の息子で」

(やめろ……勝手に、僕の心を覗くな……!)

心の真ん中にある部屋に辿り着き、魔女は盗賊めいて好き勝手に漁る。

「そのまま静かにひっそりと生きていけば良かったのに、落ちるところまで落ちて尚、更に魔女の住処にまで堕ちねばならない理由が、お前には有った筈だ」

(いやだ……聞きたくない! 思い出したく、なんて、ない……)

そして、とうとう魔女は見つけてしまう。幾重にも巻かれた鎖で固く封鎖され、重く頑丈な鍵が掛かった、その抽斗を。彼自身が遠ざけた、その禁忌の箱を。

「ほう、これはこれは……。確か、初めの疑問は『どうして、僕はこんなところで座っているのだろうか』だったか? では、その答え合わせといこうじゃないか」

(やめ、てくれ……。や、やめろオオオーツ!!!)

彼が触れる事も、近付く事も叶わなかった抽斗が、その権利など持たぬ魔女によって、いとも容易く無慈悲に暴かれる!

「さあ、見せてみる。その心の内を、洗い浚い全て!」

——がちやり。それは最後の鍵が、開かれる音。鈍色の錠が外れ、ごと、と落ちた。

——ごぶり。それは兄と義姉の眼窩から、赤い液体が流れ出る音。それは宛ら赤い葡萄酒のようで、卓上全てを赤く染める。刈り取られた真つ赤な果実が、ごと、と落ちた。

(ひいいいっ！ あ、ああ……や、めて……僕、を、視ないで……)

彼をじつと見つめ続ける罪の象徴から目を背ける事を、魔女は赦さない。

「偽りの宴は終わリだ。さあ、あるがままのお前と向き合え！」

その抽斗が乱暴に開け放たれる。そこに詰まった絶望が、撒き散らされる——

落人街での暮らしにも慣れた、ある日の事。いつものように笠を目深に被り、いつものように物の取引を終えた後は、いつものように帰るだけだった。

しかしその日、彼は偶然にも……嗚呼、偶然にも彼は、往来の中に見知った二人の姿を認めてしまう。……否、二人ではない。あれは、そう、もう一人、居る。

彼の中の獣を辛うじて繋ぎ留めていた、か細い糸が、ぶつり、と切れた。凶器を手にし狂気を奔らせる彼を、一体誰が止められよう。

我に返ると、眼前には赤い惨劇。恐怖に慄く通行人。悲鳴と怒声。何者かが駆け付ける

足音。捕まったら、全てが終わる。彼は無我夢中のまま逃げ出した。

どこをどう走ったのかは覚えていない。無意識に導かれるまま、走って、走って、走って。気が付いた時、そこは見知らぬ洋館の前だった——

(そんな……。僕は、なんてことを……)

贖い様のない罪。全てに絶望した彼の心は、赤く赤く染まってゆく。

「いえ、それもまた、誰しも、一度は思うことなのです。誰もが心に、一線を持っている。貴方はそれを一步、踏み越えてしまった。唯、それだけのこと」

優しい声色で、魔女少女が囁く。その手に掲ぐグラスに満つるは、深紅に揺蕩う赤い葡萄酒。 「さあ、私が、貴方の全てを、受け入れましょう」

こんなにも愚かで醜い僕を、少女魔は赦免すくつてくれると言う。

——ごくり。少女が、喉を鳴らす音。それが、彼が最期に聞いた音だった。



「ふう……。ご馳走様でした。やっぱり、人間を襲うのは良いわね」

空になったグラスを置き、少女——古明地さとりは、感嘆の吐息を漏らした。

向かいに座るは、哀れにも妖怪の餌食になり、空になった青年の骸。死にたての人間は希少品だ。肉の袋と成り果ててもそれは、余すところなくベットの餌になるだろう。

「それにしても、地霊殿に普通の人間が一人で、本当に一体どうやって来たのかしら」

以前に遣つて来た、盗賊の人間でもあるまいし。しかし、彼女を演じてみたのは初めてだが、存外に楽しかったなど、さとりは思う。彼のトラウマからだけでなく、もっと沢山の人間の事が知りたい。そうすれば、想起の精度も上げられようというもの。

「もし貴方が来世に訪れた時は、練りに練った脚本をお見せ出来るでしょう。ふふ」

彼の魂と骸は喰われたが、消え去ってしまった訳ではない。それぞれ辿る道は違えど、最後に行き着く先は閻魔の下だ。そして、命は輪廻する。

餓に、真つ赤な薔薇の花束を。願わくば、彼に正しき裁きのあらんことを。

そんな心にも無い事を考えて、さとりは一人、妖しく微笑った。

幻想物語寄稿集

GENSOU 'ROMAN' KIKOU - SHU

ビリーブ・ガールズ

原曲
著

風神「ブレイブ・ガール」
満足ひろpon



——ありがとう、とたった一言で貰ったものに応えられたのだろうか。

制服を箆笥の奥にしまい込みながら、色々な事を思い出す。

あなたはきつと私のことも忘れてしまうだろう。それでも私はきつと忘れない。

背中を押してくれたから、私はきつとここにいる。

襖を済ませて、青と白を基調とした巫女装束に袖を通す。白蛇で髪を結び、蛙で髪を留めた。

感傷を深呼吸で吐き出す。誰とも違えた空の下、握りしめた赤い糸が風に揺れた。

見渡した先、秋に飾られた山には光弾が入り乱れる。妖精が、河童が、天狗が、山の神様達が入り乱れてのお祭り騒ぎを引き起こした侵入者は破竹の勢いで進軍していた。

そう、あれと戦うのは他でもない己自身。守矢の風祝として負けるわけにはいかない。

「いつてきます」

たん、と地を蹴って風に乗り空をくだっていく。若草の髪はゆるやかに靡き、白蛇と蛙の髪飾りが日の光に優しく反射した。

* * *

「いやー今日の霊夢は凄まじいな。鬼巫女とはまさにこういうのを言うんだな」

「馬鹿言ってるど魔理沙もさっきの犬みたいに川に叩き落とすわよ」

「河童とワルツを踊るつもりはないぜ」

「その河童もあんたのせいで川流れでしょうに」

「売られた喧嘩は買わないとな」

「売られたのは私で、あんたは尻馬にのっただけでしょう」

軽口をたたき合いながら木々と弾幕の隙間を縫うように巫女と魔法使いは飛ぶ。

事の始まりは、博麗霊夢が受けた宣戦布告によるものであった。

『博麗神社を引き渡せ』

幻想郷に新たにやってきたという神社の巫女を名乗る少女はいきなりこう切り出したのである。その少女の名を東風谷早苗。

霊夢の強さを知るものが聞いたなら、何を馬鹿なことを、と呆れるに違いない。それでも霊夢自身が切り捨てられなかったのは面と向かって放たれた言葉と視線から。ああいう瞳をするものの強さを、霊夢は知っている。

「なんだ？ 私の顔になんかついてるか」

「別に。それよりやつと見えてきたわよ、早くしないと日が暮れるわ」

森を抜けた先、二人の眼下には整理された石畳が続いていた。はら、と落ちる紅葉が灰色の参道に鮮やかな染みを作っている。神社へと続く道は山の喧噪から切り離されたように荘厳なる静寂を漂わせていた。

「こりやすごいな……。博麗神社を乗っ取ろうとしなくても十分やってけるんじゃないか？」

「あら？ 魔理沙の分のお茶菓子が減ってもいいのね」

「さあ霊夢、さつさと頂上へ行こうぜ」

そんな他愛ない会話を遮るように、ざあ、と木々が音を立てる。紅葉のカーテンをかき分けて、凜とした声が吹き抜けた。

「ここから先は、通しません」

二人を見つめるのはどこまでも真っ直ぐな瞳、覚悟を背負った翡翠の瞳であった。

守矢神社から鳥居を抜けて、打ち倒すべき紅白の巫女の前に早苗は立ちはだかる。ただ誤算があつたのは侵入者が一人ではなかったことだ。

だけれど、一人だろうが二人だろうがやることは変わらない。何人たりとも神域へは踏

み込ませないと、幣を突きつけて敵を睨んだ。

それを跳ね返したのは真っ直ぐな、輝く金の瞳。魔法使いは風祝から視線を外さずに傍らの巫女に語りかける。

「なあ霊夢、二対一つてのは不公平だよな」

「なによ。えらく殊勝じゃない」

「だからさ、こいつは私に任せてくれないか」

「喧嘩を売られたのは私なんだけど……」

魔理沙は頑として引く様子もない。はあ、と溜息を零した霊夢は鳥居の先を見遣った。

「まったく、あんたなら戦いたがると思ってたけど……しょうがない、ここは譲るわ。この貸しは今度きつちり払って貰うからね、任せたわよ」

「任された。でも先に行くのは霊夢なんだし貸すのは私の方じゃないか？」

「じゃあ死ぬまで借りとくわ」

「やぶへびだったぜ」

ぱしん、とハイタッチをしあって霊夢は再び飛翔した。そのまま、わき目もふらずに速度を上げ早苗の横を通り過ぎていく。

「待つて！」

「おっと、待つのはお前のほうだ」

それを追わんと、早苗が振りかえると後方から光条が差す。目が眩んだうちに博麗の巫女は追いつけないほど遠くへと進んでしまった。

立ち塞ぐように眼前に躍り出たのは箒に跨がった魔法使いである。

「こっから先は通さない、ってありや？ さっきと逆だな」

「……貴女に用はないんですが」

早苗の目的、倒すべき敵は博麗の巫女だけだ。幻想郷での地位を、二柱の信仰を盤石とするため、博麗を打倒をしなければならぬ。他のものを相手にしてる暇はないのだ。

「つれないこと言うなよ。私がお前に用があるんだ」

「私に？」

目深に被った三角帽子を指でくい、と押し上げて不敵な笑みを早苗に向けた。

「お前と勝負したくなつた」

「私と？ なんの理由で」

「なんとなく、かな。霊夢で言うところの勘だな」

なんとなく、そんな理由で邪魔をされてはたまったものではない。そう訝しむ早苗を魔法使いはからかって楽しんでるのか、にししと笑っていた。

「もつと明確にいうなら、お前の弾幕が見てみたいってところだ。いくら最近やって来たって言ってもこれは知ってるだろ？」

魔理沙が見せつけるように手にしたのは三枚のカードだ。

命名決闘法。人も妖怪も神様も平等に、自分の思い描く弾幕で戦う事ができる幻想郷に定められた掟である。こちらに来る際に早苗もいくつかのスペルカードを渡されていた。

「ああそれと、私一人倒せないようじゃあ霊夢にかなうわけ無いからな。かかってこいよ2Pカラー」

憎らしげな挑発に、さすがにカチンときたのだろう。早苗は風祝の神通力を纏って、宣言する。

「いいでしょう。あなたを倒してから追うのも悪くありませんから」

「その意気だ。まだ名乗ってなかったな。普通の魔法使い、霧雨魔理沙。スペルは三枚だ」「守矢の風祝、東風谷早苗。こちらもスペルは三枚です」

「ここは幻想郷、語り合うならこいつが一番だからな！」

魔法使いは箒をぐいと天に向け、高く遠くへ駆け上がった。空へと魔法をかけるべく、スペルを宣言する。

魔符 「スターダストレヴァリエ」

魅せつけるように放たれたのは、星を模した七色の弾幕。渦を巻きながら空に輝きを散りばめていく。

早苗にとっては初めての弾幕ごっこ、間近でみればその迫力は想像以上のものであった。思わず立ち尽くして空を見上げてしまったが、そんなことをしている暇はない。頭をぶんとぶつって弾幕の先を見据える。いま見つめるべきは立ちはだかる敵、白黒の魔法使いの姿だけだ。

「さあ、ポケットしていると被弾するぜ！」

不敵に笑うと指をパチリ、と鳴らした。その合図を皮切りに天に満ちた弾幕がしゃららしゃらら、と音を奏でて降り注ぐ。

その弾幕の空白へ早苗は大きく旋回しながら飛び込んだ。密度の薄いところからさらに

薄いところへ、右へ左へ、大振りながらたしかに避けていく。視界の端から流れてくる弾は身をよじらせて、翻るスカートを焦がしながら星の雨をなんとかぐりぬけていった。が、その先に魔理沙の姿はなかった。

「どこにっ?!

「甘い!」

声したのは真上。たどり着いた空間を中心点として弧を描くように、魔理沙は風切り音すら置き去りに疾っていた。背面飛行する箒の尾が引くのは飛行機雲ではなく星屑である。

早苗が気づいたときにはもう遅かった。あたりを見渡せば、三六〇度に配置された星の欠片。弾幕による天球儀の中心に早苗は閉じ込められていた。先の第一陣はこの座標に誘い込む為の魔女の狡猾な罠であったのだ。

あらゆる方向から弾が殺到する。前方から迫る弾を大きく右に避けるも、さらに右から来る弾に慌てて上へと飛び上がる。飛び込んだ先に狙うようにまたも飛来する弾、逃れようと急制動をかけ慣性に体を引っ張られながらも振り返ると目の前にはすでに。

「しまっ」

声をかき消すように、数多の星の弾丸が炸裂した。

星は容赦なくそのまま襲い掛かっていく。

「さて、どうくるかな」

これで終わるはずがないと、魔理沙は確信していた。早苗のことを信頼していたと言ってもいいだろう。こんなものじゃないはずだと、スペルを解くことはしなかった。

星の弾ける音が響くなか、一瞬の静寂が訪れる。ごう、と爆心地から溢れる風が星の欠片を一気になぎ祓った。

秘術 「グレイソーマタージ」

吹き飛ぶ煙の中から姿をあらわしたのは幣を掲ぐ風祝。宣言したのは借り受けた神の力の一端。赤と蒼、二重の五芒星をかたどった結界が早苗を危機から護るべく展開されていた。

守矢に伝う秘術が風祝たる早苗を護るために魔理沙のスペルを打ち破ったのだ。

「これで終わりです！」

術者へと加護を与えた五茫星は幾重にも分身し、敵対者へと牙を剥くべくその身を捻りながら波状の弾幕となる。守矢の神の力を借りてのスペル、早苗は三枚などと悠長なことは言わずにこの一枚で終わりにする心づもりであった。

「へえ、お前も星の弾幕を使うんだな！」

打ち寄せる弾幕に向かい、待ってましたとばかりに魔理沙は突っ込んだ。軌道を読み、充分に引きつけ、くるりくるりとバレルロールを交えて回避しながら早苗に近づいていく。

だがそれだけだ。攻撃が届かなければ意味がない。

弾幕の隙間から魔理沙のマジックボムが投げ込まれるが、すぐさま生成される五茫星が阻み、その爆風も届かない。接近を試みた魔理沙の前には、視界を埋め尽くすほどの弾が結界とともに壁となつてあらわれる。

「ちっ！」

これでは埒があかないと判断し、距離をとろうと魔理沙は背を向けた。

「逃がしません！」

弾幕は荒れ狂う暴風が如く激しさを増していく。ただ執拗に魔理沙を屠ろうと、がむしゃ

らに弾幕は撃ち込まれていた。魔理沙も余裕ぶってなどいられなかった。

「なら、こいつでどうだ!」

きらり、と魔理沙の手に持つ八卦が描かれた炉が光る。

恋符 「マスタースパーク」

魔理沙は二枚目のスペルを宣言すると、カードを八卦炉にくべる。バチリバチリと火花が滾り、膨大な魔力が収束していく。

熱を握りしめ腕を突き出した魔理沙は、自身を砲身に極光を放った。

「くらえええ!!」

弾などと生易しいものではない。もはや砲撃だ。魔理沙の邪魔をする小さな結界を焼き尽くしながら光は早苗へと迫る。それでも早苗は避けるそぶりを見せなかった。

力には力で上回ればいいと、早苗は真正面から押し返そうというのだ。前方により強固に、より多くの風を重ねて盾となる結界を構築した。

風の盾と魔の砲撃が激突する。力と力の衝突に、空は震え、地は揺らぐ。

盾からは風が剥がれ、光からは星が零れる。

「まだまだあ!!」

「はああああ!!」

魔理沙の呪文は雄叫びに、早苗の言祝ぎは叫びに、お互いにさらに力をそそぎ込んだ。拮抗しているように思われた力比べ、だが次第に早苗の結界に亀裂が入り始めた。いくら神の力を借り受けようと、その器たる早苗には限界があったのだ。

ひび割れから漏れだした光は少しずつ大きくなる。そして呆気なく、ぱりん、とスペルカードが割れる音とともに早苗は光の奔流に飲み込まれた。

その様子を魔理沙は肩で息をしながら見守った。魔理沙の予想を遙かに越えて消耗した魔力、八卦炉を握る手がひりひりと赤くなっていた。

光が静かに消えゆくと、通り過ぎた光線の軌跡から空を飛んだ巫女が落ちていく。重力に従って、頭から垂直に落下していく。

人間が耐えられる高さではない。

「くそっ」

魔理沙は慌てて手を伸ばすが、如何せん遠すぎる。落下点に近づこうと箒を噴かすも間

に合わない。

がきり、と早苗が地に叩きつけられる直前に発動した結界と共に早苗の髪飾りが砕けて散った。墜落地点には赤黒い池がじわりと滲んでいく。

「おい！ 大丈夫か！」

駆け寄って、魔理沙が差し伸べた手は弱々しく振り払われた。

「ま、だ」

うつ伏せの早苗は腕を支えに足を震わせながら、よろよると立ち上がる。神の加護がこもった蛙と白蛇の髪飾りは粉々に、風祝の装束はぼろぼろに、血で濡れた髪は無造作に風に流されていた。

息は絶え絶え、誰が見たって満身創痍の状態。立っている事さえ奇跡なのに、それでもまだ戦うと言い張るのだ。

「まだ、戦える。私は負けられないんだ」

足を止めるわけにはいかなないと、懐からスベルを一枚取り出した。早苗は全身に走る痛みは歯を食いしばって耐え、幣を天へと向ける。

痛々しい早苗の姿に、魔理沙は眉を顰めた。

「止めはしない。まだ戦うっていうなら付き合つてやる。でもさ、お前は何のために戦うんだ？」

対峙する魔理沙の素朴な問いかけが、早苗の眼差しを揺らした。

「何の為って、それはみんなのために」

繋いだ手を振り払い、背を押す声に別れを告げてこの幻想郷にやってきたこと。新しい道を選んだ早苗を信じてくれる人がいたこと。力を貸してくれる神様がいること。

すべての想いを背負って早苗はこの地に立っていた。だから、誰にも負けられないと、ちっぽけな勇気を奮い立たせた。

「みんな、か。じゃあ質問を変えろかな。お前は楽しかったか、さっきの弾幕ごっこ」

「そんな……私は遊びでやってるんじゃない！」

「そっか、そうだよな。楽しむ余裕なんてお前にはなかったかもしれない。でもさ、弾幕ごっこって楽しいものなんだよ。私はさ、楽しかった。流星にさつきは肝が冷えたけど」

ひたむきに進んでいこうとする早苗の強さ、魔理沙は嫌いじゃなかった。

弾幕の美しさを競い合う弾幕ごっこ。楽園に定められたルールは「ごっこ」の名の示す通り所詮は遊びに過ぎない。

だけれども遊びであるからこそ誰もが親しみ、誰もが本気で挑むのだ。

心のあり方を弾幕にこめるから美しいのだ。

「だからさ、気になってたんだ。他の誰でもないお前こそが望むものが」

だが、強くありたいと負けたくないと撃ち出されていた早苗の弾幕に何か物足りないように感じていたのも事実であった。その弾幕から、魔理沙は早苗自身を見い出せなかった。

「私が望むもの……」

それは、なんだっただろうか。こらえた涙が一筋、流れ星のように早苗の頬を伝っていった。

「わからないよ、私には。お前の悩みも辿った道も、私は知らない。でも私にだって背を向けたものもある、捨ててしまったものもある」

握った八卦炉を見つめ、星が昇り始めた空を見上げ魔理沙は笑う。

つられて、早苗は空を見上げた。

ひろがるは幻想の空。

沈みゆく陽は秋めく山の全てを橙に染め上げ、藍色の陰には月が灯り、紫紺の闇に星が瞬く。

それは、踏み出した早苗だから見ることが出来る景色。いつか夢に見て、求めた幻想はこんなにも近くにあった。

「でも後悔なんてしたくないから。私は私のために楽しく生きていけたらいいなってそう思うんだ」

押しつけかもしれないけどな、と照れ隠しをして魔理沙は屈託なく笑う。その瞳に燦然たる輝きを宿しながら。

早苗が気負い過ぎていたのも事実かもしれない。

新たな出会いに胸を高鳴らせて、不思議に心躍らせたのもまた早苗自身であったから。それこそ魔理沙とも笑いあえる日もきつと来るだろう。それは素敵なこと、素晴らしいことに違いない。

遠くない未来に早苗は想いを馳せる。

でもきつと今はまだその時じゃないと、早苗はそう思った。

自身に打ち付けた覚悟は本物で、誓いは貫き通してからでも遅くない。

「ねえ、魔法使いさん」

「なんだ？」

「もう少し、我が儘を聞いてくれますか」

涙をぬぐい去り、向き合い魔理沙の瞳を見つめて告げた。夕日に照らされた早苗の翡翠には勇気を湛えた眩しさだけが宿っていた。

視線を受け止めた魔理沙はやれやれとため息をつきながらも、どこか嬉しそうに顔を綻ばせる。

「まったく……巫女つてのは頑固な生き物なんだな」

「ええ、自分でもびっくりです」

「まあ頑固さでも負ける気はしないけどな。じゃあ、待ってるぜ」

きりりん、とウインクを落として魔理沙は戦いの舞台へと先に飛んでいった。

その背を見送る早苗が取り出したのは赤いリボン。

『想いはきつと繋がるから』とあの人がくれた、赤い糸。

ほどけた髪を意志とともに、ぎゅっと固く結び直した。繋がれなかった赤い糸は確かに想いを繋げて、早苗に力を与える。

もう一度自分を信じて、軽やかに、風に遊ぶように、自由溢れる空へと舞い上がった。

準備 「神風を喚ぶ星の儀式」

五芒星の弾幕が早苗に寄り添うように生まれいく。夜空のキャンバスへ星座のように光を架けていく。その合間を縫いながら、魔法使いも金平糖を散りばめた。弾け流れゆく星々、魔理沙の魔法と早苗の秘術が共に空を彩る。

星の海を廻りながら、弾幕を交差させる二つの影を山に住むもの全てが見守っていた。「さあ、これで最後！ 全力全開だ！」

八卦路を箒に取り付け宣言する。瞬間、魔理沙は閃光と化した。

彗星 「ブレイジングスター」

無数の星屑達を携えて、純然たる光を抱え、突き進むのは地上の流れ星。幻想に跨がって誰の手も届かぬ速さで早苗めがけて突進していく。

早苗を護るものはもう無い。だが、恐怖を感じることもない。

ただ心の趣くままに。祈りを奉げ、言祝ぎを綴っていく。

信じている全てのために、信じてくれた全てのために、その覚悟は偽らざるものだから。そうだ、ただ今は前だけを見ていればいい、全てをぶつければいい！

奇跡「神の風」

集わせた奇跡を、信じた幻想を風に込めて。

幻色の風が霊山へと吹き渡る。祝福を告げる風はどこまでも響いていく。

現人神たる早苗自身が巻き起こしたのは迷いも後悔も吹き飛ばす神の風。力強く澄み渡る嵐のような弾幕を早苗は纏った。

そして、惹かれ合うように星の光と神の風が、再び激突する。二人の心が真つ直ぐにぶつかりあう。互いに譲ることはない。

星の輝きは希望の欠片に、道なき道を照らし出す。

神々しき風は愛の賛歌に、魂を震わす音を奏でる。

星に祈りを、風に願いを。

その美しさに早苗が、魔理沙が、見るもの全てが心を奪われた。

そんな弾幕ごつこにも終わりはくる。

流れ星は止まることなく、風を突き破った。スペルカードが風にほどけて消えていく。

早苗の、敗北であった。

ぶつかりあったその勢いのまま二人はもつれ合い、風に身を任せてふらふらと地上におりていく。

べたり、と尻餅をついた早苗はそのまま空を仰いだ。へとへとに体に満足感が染み渡つて、負けたというのに自然と笑いがこぼれた。

「私の勝ちだな！」

満面の笑みを浮かべた魔理沙が差し伸べた手を早苗はしっかり握り返して、立ち上がるうとした。はいいが、二人とも限界はどうに越えていたのだった。

「おっとっと」

「わわっ」

引つ張り上げた魔理沙の足元は覚束なく、立ち上がった早苗もつんのめって、二人してふらふらでお互いがお互いに寄りかかるように、なんとか立った。

それがどこか可笑しくてどちらともなくまた笑った。

「あーもうダメだ！ 体が動かん！」

「奇遇ですね。私です。どうかよく生きてますね、私」

「正直すまんかった、えーと早苗、でいいか？」

「いいですよ、魔理沙さん」

「なあ早苗、楽しかったか？」

「ええ、とても」

「それは良かった」

「ねえ、魔理沙さん」

「んー？」

「……ありがとう」

「どういたしました、だぜ」

遠くから、二人を呼ぶ声が聞こえる。これからは宴の始まり、幻想郷の夜は賑やかに朝へと向かっていくのであった。

* * *

—— どうしてそんなに強いのか？　と言われましても。うーん、私は強くなんかありませんよ。もっと強い方なら沢山います、霊夢さんに魔理沙さんに……。

—— そういうことじゃない？　むむむ。なかなか難しいですね。

—— 何もおそれないで、目もそらさないで、歩いていける強さが欲しい、ですか。きっとそれならお答えできます。

—— 秘訣なんかありませんよ、私が特別というわけでもありません。もっとずっと単純なこと。信じることです。

—— そう、信じること。あなたの想いを信じることです。誰でもないあなたこそが。

—— それでも不安、ですか。じゃあこういうのはどうでしょう。あなたの想いを誰かに伝えてみる、というのは。もしかしたらこれが一番怖いかもしれませぬけどね。

——言葉にするとというのは勇気がいります。でも形にした想いはきつと繋がるものだから。もちろん言葉じゃなくてもいいんですよ。

——じゃあ、とっておきのおまじないをしてあげます。この赤いリボン、プレゼントしましょう。私にはもう必要ないから。言ったでしょう。

——想いは確かに繋がるって。

幻想物語寄稿集

GENSOU 'ROMAN' KIKOU - SHU

幻想の旅人

原曲
著

ロストドリーム・ジェネレーションズ
桶住人のmist



ユメを抱いてユメに生きる。そんな文句も今は昔。

人類は、大きな一步を踏み出してしまった。

ヒトは既に科学の奴隷と化し。

暴ける世界は露と消え。

核の力で世界を支え。

全てが便利な世の中になり。

最大多数の最大幸福のために、科学技術はここまで進化してきた。

しかし、そうして“私”の目の前に突き付けられた現実は。

ユメも希望も無い、^{ディストピア}楽園への旅路だった。

☆☆☆

「いらっしやいませ。ご注文は何に致しますか」

オススメは？

「お客様の嗜好に合わせた商品ですと、こちらのサブリメイトッドティとギャバエルジツ

クシュークリームの設定、二・九九世界円がオススメです」

じゃあそれでいいよ。

「かしこまりました。お客様の残高を表示致しますか？」

結構よ。

「ありがとうございます。少々お待ちください」

最早有り触れたこのロボットの接客の冗長性に辟易とする。少々たつて一分もかからないし、わざわざ言うほどのものかしら。娯楽的に通貨を持っているとはいえ自動的に十二分な額がチャージされるからどうでもいいし。そんなことを考えながら注文の履歴を眺める。ここ最近紅茶ばかり飲んでるわね……評価関数どうなってるのよ。たまには違うものをサジェストしないのかしら。

ああ、自己紹介がまだだったわね。私は管理記号3927274ee5よ。かつて付けられた名前は今となっては何の意味も持っていないし忘れちゃったわ。人間同士でのコミュニケーションがなくなってしまうって以来、どうでもいいものになってしまったわ。

技術的特異点を目の前にして私達人類の社会性は完全に崩壊してしまっていた。元々、戦争こそなかったけれど世界はあらゆる規模の抗争で覆われてしまっていて、ずるくて、

声が大きくて、悪知恵が働いて、そんな人たちばかりが得をして。完全なモラルハザードを起こした世界がボロボロになっていくのは火を見るより明らかだったの。

それを憂いた科学者たちが作り出したのが、モラルを学習して生成する人工知能。最大多数の最大幸福を理念に設計され、無数のルールを学習、より最適なルール作りを任せ、その執行もさせたのだけれど、早い段階で作られた「システムに仇なす人間の粛清」や「人間の社会からの切断」というルールが施行されて以来、急速に人類の権利は奪われていったわ。元々モノのインターネットが流行った影響で媒体はそこら中に溢れていて、その殆どに反旗を翻されたのだから、私達人類に敵うはずもなかったのよね。

当初はあくまで抵抗を続けるという人が多かったけれど、粛清の効率がどんどんよくなつていった上、人工知能側の「管理下」の生活の不自由の無さが喧伝されたものだから、そんな人は日を追うごとに減っていったみたい。私たちのようにすぐさま「管理下」に入つた人間は、まあ多少のケチはつけながらも、今日まで一切の不自由も、何の不安もなく今日まで生きている。一方でそうでない人たちはどうなったのかしらね。まあ想像に難くないけれど。

こうやって衣食住を最適なように管理されて、ヴァーチャルリアリティ上で娯楽を全う

するのはこれ以上となく幸せなことだと思ふ。大人しく恭順していれば、命が保証されるばかりじゃなくて、他では味わえないようなとてつもない多幸福感に包まれて、他のことなんてどうでも良くなつてしまふの。きつと被らされている電極メツトから色々流されているのだと思ふけれど、今となつてはどうでもいいことね。

そんな生活が短くない時間、ずっと続いていて、その間何の不満もなかった。困ることなんて何一つ無く、今となつては捨て去つた「管理下」に入る以前よりもずっとずっと幸せに暮らしていると思ふ。人々が理由もなく常に争い、一時も気が休まること無く罵詈雑言が飛び交う社会から脱却できたのもそうだし、そうなる前から信用出来ない人たちの誠意の感じられない薄っぺらな言動にうんざりしてきた日々から解放されたのもそう。

科学に関してもそうだ。地球の外や海の底、或いは人の頭のなかにあつた未知の世界への探究も人の手を離れ、ロボットに好奇心を託すことしか出来なくなつた。その頃から科学への期待も急速に失われていき、生きていく道自体もどんどん減つていた。仕事が無ければ何も出来なかつた当時の環境で世界に失業者が溢れ、爆発寸前だつた。考えれば考えるほどどうしようもなかつたんじゃないのと思つちやうわね、本当に。

そんな「管理下」に入る前のことに思いを馳せ、ふつと唐突に思い出したのは、子供の

頃の他愛のない、いや他愛のないと思っていたやりとりだった。

☆☆☆

「——ちゃん、将来の夢はある？」

「んつとね、おかしやさんになりたい！」

「うーん、それも夢には違いないんだけど、それはやってみたいお仕事かなあ」

「だめ？」

「そんなことないさ。ただ、仕事というのはあくまで生活するための方法だからね。例えば無限にお金があつて、なんでも出来るとしたら何がしたい？」

「なんでも？ うーん……あ、毎日おいしいおかしが食べたい！」

「ふふつ、お菓子が食べたいか」

「ただのおかしじゃなくて、世界一おいしいおかしをおなかいっぱいになるまで！」

「いいじゃない。他にはある？」

「ほかに？ うーん……」

「ま、考えておくといいよ。将来に向けてやり残しは作っておきな」

「え、やりのこしちやいけないんじゃないの？」

「そんなことはない。何かやり残しておかないと、大人になってから何も出来なくなっちゃうの。だから、子供のうちに楽しみを全部消化するんじゃないかと、大人になってからやることを残しておくといいよ」

「ふーん……」

「ま、まだ難しいかな。いずれ、そうだね、あと十年もすればわかるさ」

☆☆☆

そんなことを一方的に言ってきた……あれは誰だったかなあ。今となってはあの人の言葉の意味も少しは解る気がする。

人生の旅人なんて割合陳腐化した表現もあるけれど、あのフレーズの裏には目的や目標のない旅は地獄ということも含まれていると考えれば、なるほど言い出した人はよく解っているという印象を受ける。夢を無くした私たちは旅をやめてしまった。ぬるま湯の中を

揺蕩うだけの日々に満足してしまつたからだ。それでいいと思つて、この「管理下」の生活を選んだのだから。夢のない私にはびつたりの末路よね。

「お待たせしました、サブリメイテッドティ、ギャバエルジックシュークリームです。ごゆっくりお楽しみください」

さつき注文した紅茶とシュークリームが届けられた。天然のそれと遜色ない、在りし日の茶葉の香りとクリームの甘みを再現し私を刺激してくれる、ように感じる。そもそもこの感覚刺激だつてどこまでつくりものなのかわかつたものじゃない。それでも私の食欲を満たし、私の舌を満足させるには、問題なんか何もない。

「昔食べたシュークリームも、美味しかったなあ……」

ぼつり、と。不意にこぼれた言葉に自分で驚く。私つてこんな声だつたのか、と。そして、そんなことも最早覚えていなくなつたのか、と。

「どんな味、だつたっけ……」

記憶を手繰り、手繰り、かつての感覚を思い出していく。

「花の香り……風の感触……水の音……暑い日差し……」

ヴァーチャルリアリティの描く世界からかつての記憶を引きずり出す。「管理下」以前

だって世界は自然な状態では無かったけれど、それでもそれは私の本来の感覚だった。

一度は棄てたそれらは、今や夜空に輝く星屑の様に燦然とした輝きを放っていた。身勝手なことだけけれど、理性的ではないけれど、それでも。

「取り戻したい……取り戻さなきゃ……！」

こうして、私の世界は、たったひとつの夢となった。

☆☆☆

久方振りに腕を持ち上げ、目深に被らされていた電極メットを取り外す。萎えた腕にはあまりにも重かったが、端を持ち上げ、滑らせるように後ろに落とすことに成功した。久しぶりに開かれた眼には部屋の明かりが眩しくて、周りがよく見えない。

続けてベッドの上をゆっくりと転がり、端から降りる、というよりも落ちた。そんなに高くないはずなのに、落ちた衝撃で思わずぐえつという声が零れる。数十センチでも存外痛いものらしい。

というか、痛いだなんて感覚ももうどれくらいぶりだろうか。ジンジンとした、懐かし

い感覚に仄かに胸が躍る。懐かしい、痛さ。こんなに辛いものだっけ……。左肩折れたりしてないよね……。

段々と眼が慣れてくると、無機質な白い部屋が映る。横になっていたベッドと何かの計測装置、それから……。あれ？ 扉がない。

確かだいぶ前にこの部屋に入ってきた時には病室に有り触れた引き戸をくぐってここに入ってきたはずなのに、その出入口が無い。なんで？ そう思い部屋を見渡そうとして、気付く。足が痩せ細ってしまい、うまく立ち上がれないことに。

ありつたけの力を込めて部屋中を這いずり回り、出口を探す。入ってきたはずの扉も、ありそうな窓もなく、完全に仕切られた部屋。無機質なその空間に、小さくない焦りを感じる。

その隅に、なんと言えばいいのだろうか、空間の歪みとも言うべき妙なものが見えた。ヴァーチャルリアリティ空間ではよく見た、光がねじ曲がったように見える場所。ゲームとかではここに飛び込むと別のところに繋がっていたりするけれど。或いはまだヴァーチャルリアリティから抜け出せていないのかしら。

そんなことを思いながら手を伸ばすと、急に空間が切り開かれ（という他ない）、私の

身体はその空間の切れ目に一気に吸い込まれた。

★☆☆★

はっと目を覚ますと青空が広がっていた。身体を起こし辺りを見渡すと一面の草原が広がっていた。ぽかんとしたまま遠くに目をやる。遙か遠方に山が見えるけれど、他にはただっ広い草原しか見当たらない。いや、遠くの方に集落っぽい何かが見えるかしら。

こういう時、何もないとところに放り出されたら取り敢えず人のいそうな方に向かうというのゲームの定石よね。その辺に野生の何かがいたらとっ捕まえる装備を整えるのだけど、いかんせん今のままじゃ這いずることしか出来ないし。

しかし、これかなーり遠い感じね……。歩いても結構掛かりそうなのに、こんな力の入らない状態であんな距離動けるのかしら。とは言え動かないと何もわからないまま餓死しちゃうし、なんとか進まない……。。

暫く草に身体を擦りつけながら進むと、いつの間にか日が沈み、辺りが暗くなり始めて

いた。遠くの集落のような場所は灯を点けたようで明かりを伴い、先程よりもわかりやすく、かつ人の気配を感じられた。ただその距離は縮まったように感じられず、身体中の痛みも相俟^{あいま}って、急激に心細くなっていた。どうして脱出しようだなんて思ったのだろう、そんな考えがぐるぐると頭を巡り、昏い絶望感に襲われる。

「お嬢さん、どうしたの？」

突然、何の前触れも無く背後から声を掛けられた。不意の出来事に身体を強張らせ、恐る恐る後ろを振り返ると、きらびやかな、妖しく色を放つ装いの金髪の女性が佇んでいた。「そんなところに突っ伏して……もしかして、行き倒れ？」

「……………」

返答しようとしてまた驚く。上手く声が出ない。ひゅう、ひゅうと空気が口を出て行くのだけれど、喉が上手く震えてくれない。どうして。

「あらー、ちゃんと声が出ないのね。それほどまでに衰弱してるってことかしら。んー、面倒だけれど、連れて行ってあげましょうか」

そんなことをブツブツと言った彼女は、どこからかカラスを呼び出し、集落の方角とはどこか別の方向に飛ばせた。

「薬師への手配はこれでいいでしょう。貴方はここにいても大変でしょうから、別のところに連れて行くわね」

そう言うといきなり地面からの反発力が無くなり、自由落下してしまう。かと思えば間もなく地面に衝突し、身体中に痛みが走る。うう、という呻き声を上げながら顔を上げると、さっきまで遠くに見えていた集落が目の前にあつた。

目を丸くしたまま呆然と集落の方を見つめ、はっとして金髪さんを探す。周りを見渡しても最早影も形もなく、後ろにはただただ草原が広がっているだけだった。

なんか、まだヴァーチャルリアリティ空間に迷いこんでいるんじゃないかと錯覚してしまふ。或いは電極刺激で夢でも見せられているのかしら。

あまりの出来事に現実味を失いつつも、野垂れ死なないために這い進む。ずり、ずりと身体を引きずり、やっとのことで集落の端に辿り着く。その境界を超えたところで、意識が途絶えた。



「……あら、目が覚めたかしら」

ぼんやりとした視界には見知らぬ天井が、耳には聞きなれない声が飛び込んできた。

「かなり衰弱しているということで、ちよつと強めの薬を投与させてもらったわ。栄養失調ではなさそうだったから、目が覚めたらゆっくりと身体を慣らしていけば大丈夫よ」

靄もがかかった意識に聞かされた言葉は耳を素通りしていく。

「つて、起き抜けで言われても解らないわよね。取り敢えず無事よ、とだけ」

無事だということばに少し安心しかけたが、その直後、胸からお腹、更に腕や足のひりひりする痛みを感じる。

「あなた、長時間身体を引きずられでもしたの？　なんか身体に擦り傷が多すぎて見てられなかったのだけだよ」

這って移動していたから、という声も紡がれることすらなく、お医者さんのような銀髪の女性に届くこともなかった。

「うーん、意思疎通が出来ないというのはもどかしいわねえ。地上の人が月に来た時以来

かしら」

月に来た、という言葉に引つ掛かりを覚える。この人は月の住人だともいうのか、と。ただそんな疑問も身体中の痛みで消え去る。

「取り敢えず、声帯は二、三日もリハビリすれば大丈夫よ。手足のリハビリはもうちよつと時間がかかるけれど、動けるようになるまでは私が見てあげるから大丈夫よ」

「あ……わ……？」

「あら、そういえば名乗ってなかったわね。私は八意永琳。暫くあなたの世話をすることになるわ。よろしくね」

エイリンと名乗った銀髪の女性は湯呑みの白湯と何かの粉薬を私に飲ませる。ゆっくりと飲み込むと、それだけで痛みが緩和され、身体が軽くなったように錯覚する。

「さあ、はつきりと目を覚ましたらリハビリよ。最初はかなり辛いだろうけれど、頑張つてね」



「水馬赤いな。ア、イ、ウ、エ、オ」

「あめんぼ、あかいナ、あ、い、ゆ、エ、ヨ」

「柿の木、栗の木。カ、キ、ク、ケ、コ」

「かきノき、くりノき、か、き、く、くえ、キヨ」

「うん、まだ発音がちよつと怪しいところもあるけれど、これなら会話も出来そうね」

「あ、ありかと、ございます……」

自分の発音の甘さにちよつと恥ずかしく思いながらも、もう何年も取っていない人との意思疎通が出来たことに、心が踊った。

「さて、改めて。あなたのお名前は？」

「なまえ……」

名前。そんなものはとつくの昔に捨ててしまった。当時なんて名乗っていたかも既に覚えてなんていない。

「なイ……」

「あんなら、名前がないのは困るわねえ……考えておかないとね。じゃあ、あなたはどこから来たの？」

「どこ……」

どこから。あそこはどこと言えばいいのだろう。国という垣根も何も無くなってしまった時代ともなると、場所を表す言葉もはや必要なくなってしまうって、よくわからない。

「ここじゃないとどこ……?」

「いやそれは判るけれど」

何か伝わるような言い方が出来ないだろうか。そういえば永琳さんは月にいたかのような言い方をしていたっけ。

「じゃあ、ちキユウ……」

「あー、まあそうね。月の都じゃあなたみたいな顔付きの人は見たことないし。しかし、うーんあなたのことがなんにもわからないわねえ……。記憶喪失とか？」

「き、きオクは、ある。ただ、なまエも、ちメイも、なくなっちゃって……」

「ふーん、なんか妙なところから来た、というのは判るわね」

「エイリンさんは、つき力ら……?」

「そうよ。あなたたち地上人が何度か訪れて、結局移り住むことが叶わなかった月の住人よ」

そんな、どこか皮肉も混じったような言葉を投げかけられる。

近年は月にわざわざ人を飛ばすことも無くなり、月面探査もロボットを走らせるばかりになっていった。地球外生命を発見するという名目はいつの間にか何処かへ消え、最近は太陽系を侵略でもしようというスタンスすら感じる開発活動ばかりだった。それも多くは謎の失敗に終わったという話だったが、なるほど先住人がいらしたのね。

「いつも気になっていたのだけれど、なんであなたたちはわざわざ月にやってきたの？」

「なぜ……」

理由を聞いたことなんてただの一度もない。どういう目的で、どういった理念で。ただ、今の私が思うのは、多分これだけ。

「たぶん、ユメ、だったから……」

「ふうん、夢ねえ。そんなのは幻想ユメでしかないというのに」

呆れたような表情を浮かべる永琳さんに戸惑いながらも反駁はんぱくする。

「それでも……、それがわたしたちのゆメだから……」



「……という話があつてねえ」

「は？ 終わり？」

酒を飲みながら気紛れに紫の話聞いてみたら中途半端なところで終わり面を喰らう。夕暮れ時から始めた宴会はすっかり落ち着き、そこらに酔い潰れて寝始めている輩もいる始末だ。誰が片付けするつてのよ、たく……。

「ええ、話はこれで終わり。その後彼女は幻想の住人として未永く幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし」

「ガキを煙に巻くような締めとかどうでもいいから。結局そいつの夢つてのが何だったのかよく判らないじゃないの」

「あら、凄く解りやすくなかったかしら？ 文明に奪われた世界きおくを取り戻すこと、よ」

「いやー、まずそれが意味解らないというか。そもそもそんな立てもしないような状態でどうやって生活してたつてのよ」

「あら、私もその気になれば寝たきりで生活出来ますわ」

「だったらもう布団に一生引きこもって私の前に出てくるな」

「ああん、霊夢だったらつれないわ」

「きつしよい」

紫をあしらひ、杯の酒を飲み干す。ぬるい酒では火照った身体を冷やしきれない。

「紫、冷出して」

「人を小間使いみたいに」

そう言いながらも新たに冷爛を出してくれる辺りこいつも中々使えるわね。新たに注がれた酒で身体を冷ます。

「で、あんな話振ったからには、なんか言いたいことがあつたんでしょ？」

「んー、まあそうね。霊夢はどうかしらねって思つて」

「どうつて言われても、私は自分の身体で自分の世話して生きてるじゃない。共通する部分なんて全くないわ」

「そうかしら。賽銭での収入が全くない中、どこかから支給される物資で食いつないでいるじゃないの、貴女」

「あれは異変解決の報酬だから自分で稼いだものよ」

「最近はいんまり異変も起きていないじゃないの」

「維持費よ」

「維持つて言っちゃつて。まるで自分も管理されているものだと認めてるようなものじゃない」

「うっさい。私は誰にも縛られたりしないわ」

「誰にも縛られないというのはいいけれどね。貴女に夢や目標みたいなのあるの？」

「そりゃあるわよ！ 千客万来賽銭万歳！」

「それ貴女の努力じゃどうしようもないじゃないの……」

「何言ってるの、そのために異変解決して神様降ろして異変解決して妖怪追い返してるんじゃない」

大体紫むらみちたいな妖怪が神社に入り浸って私の夢を邪魔してるんじゃないの。腹立たしいことだわ。

「それを言うんだつたら、あんたはなんか夢とかあるわけ？」

「私の夢はこの幻想郷そのものですわ」

「しけてるわね」

「貴女よりも壮大な夢だと思いますけれど？」

「まだ魔理沙の夢の方が明快よ。あんたの夢じゃ達成したかどうかもわからないじゃないの」

「先の話のように、夢は最後までやり残しておかないといけないのですわ」

「ふん、妖怪のいう夢なんて私ら人間にはよく解からんものなのかもね」

どこか遠い目をする紫を横目にお酒を流し込む。何考えてるのかいつも解からん奴だけど、今日はどこか人間っぽい気がする。

「あんた、今日なんか変じゃない？ 昔のことでも思い出したの？」

「いえ……まあ、そうかもね。私が今の夢を抱いた頃のことをちょっと思い出してしまっただけですわ」

「ふうん、あんたもそんな日があるのね。自分の幻想ゆめに溺れるなら好きにしなさい。私は私の夢のためにあんたらを一人残らず退治するだけよ」

「ふふ、こわいこわい」

いつもの人を喰った笑みを浮かべる紫を睨め付けながら杯の酒を飲み干した。



不意に目を覚まし身体を起こす。辺りはまだ暗く、とんでもない時刻に起きてしまったことを理解する。

「紫^{あむら}がまた妙な話をしたせいで……」

怒気の籠もった独り言を零しながら布団を脱し、お茶を飲むべく台所を目指す。

廊下には酔い潰れて寝入った妖怪と亡霊と神様がそこら中に転がっていた。こいつらをまとめて退治すれば妖怪神社の汚名を返上できるかしら、などと思いつながら一部を避け、邪魔なのを蹴飛ばしつつ前へ進む。蹴られてもそのまま寝続けられるのは流石というべきかしら。

連中のしぶとさにほとほと呆れつつ台所へ辿り着くと、戸棚を漁る黒い影が見えた。

「……魔理沙、あんたなにやってるの」

「おお霊夢。こんな時間にこんなところで会うなんて奇遇だな」

「ここは私の神社なんだから私がいるのは奇遇でもなんでもないでしょうが」

「私がこんな時間にこんな辺鄙な神社にいるのは珍しいだろ？」

「常連のくせに何を言うか」

「私なんかを常連客扱いか。参拝客を呼びこむ方法を考えたほうがいいんじゃないか？」

「あなたが人の何倍も賽銭を入れてくれればいいことでしょうが」

「ゼロは何倍したってゼロだろうが」

そんないつも通りのやりとりをしながら二人分のお茶を淹れる。魔理沙はこの戸棚に入っていたものかも判らない羊羹を取り出し皿へ盛りつけていた。

「こんな真夜中に食べるの？」

「あるものはいただくぜ」

「凶々しい奴」と毒突きつつお茶を縁側へと運び腰を下ろす。夜空には無数の星と大きな月が煌めいていた。

「しかしこんな時間に起きてくるなんて珍しいな。変な夢でも見たか？」

「そんなとこね。紫が変な話をするもんだから夢見が悪いつたらないわ」

「そういうやさつき酒呑みながら紫となんか話してたな。何の話してたんだ？」

「多分外の世界の話だと思うけど意味解らなかつたわ。夢がどうかいってたけど」

「夢？ 寝る時の夢の話をしたせいで落ち着いて寝られなくなったってことか？」

「そっちの夢じゃないわよ。野望とか目標とかの夢」

「そっちだったかー」

大袈裟に頭を叩くりアクションを取る魔理沙に思わずクスリと笑う。こんな月夜に笑い合えるのであれば紫のつまらん話を聞いて安眠妨害されたことのお釣りはくるかしら。

「妖怪にも夢はあるんかねえ」

「まあ、妖怪の連中は夢を食い物にしてる連中だから、一個くらい蓄えてても不思議じゃないわ」

「その表現は誤解を生まないかー？」

「上手く言い表せているでしょう？」

まあな、という返事に合わせ同時に茶を飲む。

「なんか最後に『夢はあるのか』って言われたけど、そんなの参拝客がわんさか来ること以外あるわけじゃないじゃないの、ねえ」

「いやあ、霊夢の夢はなんというか、道筋が漠然としすぎなんじゃないか？」

「なによ、そういうあんたは解りやすい夢を持つてるっての？」

「明快だぜ。一人前の魔女になる、霊夢に勝つ、星を掴む、世界をこの手に収める、エトセトラ、エトセトラ」

「随分多いのね。それに後半は同じように果てしないし」

「一つだけだと立ち止まっちゃうからな。幾つもあれば、気分転換に他のところを攻められるだろ？」

「私達人間の寿命じゃ、全部は敵しいんじゃない？」

「それもそうかもなー。妖怪や本物の魔女の連中が羨ましいぜ」

「やらせると笑う魔理沙を見て、思わず湯呑みを握りしめる。」

「魔理沙は、強いのね」

「まー生半可な相手には負けるつもりはないけど、それでも私よりも霊夢の方が強いじゃないか」

「私はそんなに強くないわ」

「おいおいどうしたんだ。今日はほんとにおかしいぞ、霊夢」

魔理沙の怪訝な顔に、お茶を少し飲んでから答える。

「私は、あんたみたいに自分の芯になるような夢は持ってないわ。異変解決も、妖怪退治

も、それが私の役割だからこなしただけ。あんたみたいに能動的に首を突っ込んだわけじゃない。私は、あんたみたいに強いわけじゃ——」

「何を言い出すかと思えば、ほんとに何言ってるんだ」

魔理沙に言葉を遮られる。こちらを真つ直ぐと見る目に射抜かれそうな錯覚すら覚える。「あのな、夢つてのは弱い奴が立ち上がるために持つものなんだ。夢を持ってない分強くないだつて？ そんな強者の言い訳さ。本当に強いやつつてのは夢なんかなくたって、自分の理想に沿った行動を出来る。それが出来ない弱いやつだけが、指針としての夢がいくつも必要なんだよ」

魔理沙は一息ついてお茶を含んでから、続ける。

「ま、もし霊夢が立ち直れなくなるようなら、私が霊夢の前に立ちほだかつてやるよ」

「ふつ、なにそれ。たとえ心が折れかかってても、あんたには負けないわよ」

「へっ、いつか霊夢がどうやつても勝てないようになって、私を目標にさせてやるさ」

魔理沙の言葉ひとつひとつに力をもろう。静かに笑いかける。

「ありがと。なんか元気出たわ」

「おう。私に負けたくなかつたら、満身創痍みんしんそうよくも立ち上がりな」

「あんたはその幻想^{ゆめ}を追い続けてなさいな。追いつかれてはやらないわよ」
魔理沙に笑顔を返す。にひひと笑った魔理沙は湯呑みの茶を一気に飲み干した。
きらりと走った流星を視界の端に捉え空に目を遣ると、東の空が明るみ始めていた。

☆☆☆

「お陰ですっかり動けるようになりました。永琳さん、ありがとうございます」

「どういたしまして。あなたはこれからどうするの？」

永琳さんの問いに、しばし考えてから、答える。

「これから考えます。取り敢えず、この辺り一帯を見て、色々と経験しようと思います」

「ふうん。ま、死なないように頑張りなさい」

永琳さんの言葉にまた頭を下げる。顔を上げると、永琳さんは朝日を背に受け、その顔が見えなくなっていた。こんな強い逆光も今は心地よい。

「ではまた縁がありましたら。お世話になりました」

永琳さんに背を向け、歩き始める。幻想^{ゆめ}の世界で voyage^{たび}を始めるために。

幻想物語寄稿集

GENSOU 'ROMAN' KIKOU - SHU

A girl has nine lives

原曲
著

from the corpse to the journey
卯月秋千



ごろんごろんごろん。

丑三つ時の辻で、巨大な猫が喉を鳴らしている。

違う、それは車輪が轍を刻む音だ。ずっしり沈み込んだ車体が、生温い大気を掻き分けて進んでいた。

火焰猫燐は、猫車を押しながら独り言ちる。

「いやあ、今夜も大漁ってもんだねえ」

彼女が好む死の香りが、界限に満ちていた。青白い燐火を纏った一輪車。その荷台からは、赤茶けた手足が針鼠のようにはみ出している。疫病で体液を滴らせながら、痂皮に塗れて亡くなった者たちの死体だ。

里で猛威を振るう流行病は、未だ収束の兆しがない。病に倒れた人々は、生きる気力そのものを喪ったように、床に就いたまま腐っていった。口さがない者はこれぞ末法の世だと騒ぎ、何十年ぶりに乱痴氣踊りが街を席卷した。

だが、火焰猫はそんな趨勢に欠片も興味を持っていなかった。彼女が好むのは浮世のまやかしではなく、死にたての死体との生き生きした遣り取りだったから。特に死者が暢気に話す言葉などは、一番のお気に入りだった。過ぎし追憶、今日の夕食、何処かで待って

いるはずの約束。日常がそのまま冷凍されたような新鮮な言動。そしてそれが他ならぬ死者から溢れ出ているという倒錯に、火焰猫は深い快樂と安寧を覚えるのだ。

けれど、心躍るはずの骸を山盛りに運びながらも、火焰猫は浮かない顔だった。

「やっぱり死体は活きのいいのに限るねえ……ちつともドキドキしやしない」

病で命を日々削られた死体は、理不尽への怨嗟をまき散らすばかり。生の記憶あつてこそその死の躍動であるのに、既に道程が死に塗り潰されてしまっている。それは塩味一辺倒のコース料理のようなもので、火焰猫は甚だ遺憾であった。

とは言え、今なお燃え続ける灼熱地獄跡の火を消すわけにはいかない。最近は親友の留守も増えたので、気を抜くとすぐに温度が下がってしまうのだ。加えて、主の妹からの言い付けもあった。

「まあ、仕方ない、仕方ない」

幸か不幸か、彼女は領分をわきまえた真面目な火車だったので、これも仕事と割り切つて猫車を押し、地下へ通じる間欠泉跡に潜つていった。

一輪車はゆっくり、暗くて長い縦穴を降りて行く。燐光がぼんやり周囲を照らしていた。この通路を往来する者も随分減つた。ひところは物好きな観光客さえいたというのに、

今や人間にとって、地底は単純な恐怖と嫌悪の対象に戻ってしまった。何とも世知辛いものである。

不意に、死体を積み上げた荷台のバランスが崩れた。死装束の妖精たちが何処からともなく現れ、ふらふら揺れる車を支えた。妖精たちは過積載の荷台を一瞥して、火焰猫にじとりと非難がましい視線を投げた。

「大丈夫大丈夫、猫車は私の体みたいなものさ。でもありがと。助かったよ」

この妖精たちは、火焰猫の友人だ。懸命に小さな羽根を飛ばたかしているが、全身白塗りの姿はそれなりに不気味だった。存外ノリが良いので火車とはウマが合うらしく、しばしば共に行動しているのだった。

そうこうするうちに、火焰猫御一行の足下に鈍い光が見えた。地獄の旧街道だ。もう猫車を浮かせる必要はない。

きつきつきつきつ。

軋む一輪車が、路面の小さな凹凸を猫足の如くしなやかに吸収していく。この猫車はちよつとやさつとでは壊れないし、少し妖気を込めれば多少の形態変化さえ可能だ。怨念が長年染み付いた車体は、もはや火焰猫と一心同体の霊的存在に近かった。何千何万の死体を運

んだ、ご自慢の相棒なのだ。

旧地獄街道を抜け、釜の蓋と呼ばれる広い空洞から更に下ると、岩盤の向こうからでも熱気と微動がじわりと迫ってくる。やがて、沸々と煮える灼熱地獄跡まで辿り着いた。

眼下でオレンジ色に蠢く溶岩の窯。その中で対流しているのは只の溶岩ではない。数え切れぬ人の業が溶け、未だ熱を失わない旧地獄のマグマだ。

「よいっしょー」

火焰猫は猫車のハンドルを勢い良く持ち上げた。

ヒトガタの山が崩れる。積み上がった死体たちが、ぼたぼた落ちていく。赤熱の上に落した躯体は、しばらくグズグズ煮えたかと思うと、ポツと大きく火を上げた。身に残った油分はよく燃えるのだ。

炎が群れ立ち昇り、やがて巨大な焰の塊となった。火柱の芯の辺りで、蒼く小さく火花が震えている。ふるふる、ふるふると、人の器から抜け出そうと藻掻いている。その青い閃光は、魂魄が発する輝きだ。命が燃える色と言ってもいい。

よく見れば、あちこちでむず痒そうに火花が揺れていた。卵から産まれようとする稚魚のようだ。そのうち一つが、弾けて飛び出す。体を喪った青白い光は、ふわと火焰猫の方

に漂ってきた。

人が死ねば魂は天へ昇り、魄は地へ帰ると説いた者がいたという。しかし陰なる魄の働きが過剰になれば、魂は重力に引かれて地に墮ちる。成仏することのない、因業深い魂。これがいわゆる怨霊だ。

子猫のように纏わり付く怨霊を意に介さず、火焰猫は傾けていた荷台を水平に戻した。転がり落ちかけていた最後の死体が、縁に引っかかって止まった。

「おっとっと危ない。お姉さんはこっちだよ」

この死体が、今日のメインディッシュなのだ。既に死後硬直が始まりかけているのか、倒木のように硬い。火焰猫は口をにんまり歪めながら、丁寧に骸を抱えて荷台に戻した。

窯の中で器を失い、焼けた灰さえ喪っていく元人間たちに火焰猫は背を向けた。満員だった荷台も最早一人だけ。

「今日のお姉さんは、VIP扱いだねえ」

そこには、小袖を着込まされた老婆が横たわっていた。死装束らしからぬ白黒のフリルで彩られた小袖は、丁寧に縫製されている。個人の葬式に合わせてこれだけのものを作るのは、簡単なことではない。恐らく人の手によるものではないのだろう。

ぎゃあぎゃあと、地底の空を舞っていた地獄鴉たちが喚き始めた。いつもと違う死体の様子に気付いたのか、そのまま降りてきて啄もうとする輩さえいる。

「しっしっ、あっちへ行きな。お空が帰ってくるまでいい子にしてるんだ」

火焰猫は燐火に包まれた右手を振る。追い払われた一羽が恨めしそうに啼いた。

「ねえねえ、お姉さん。あんまり寝てると鴉のエサになっちゃうよ」

火焰猫は悪戯気に言った。老婆は鴉の襲撃に反応する様子もなく、荷台に横たわったまままだ。構わずに、火焰猫は喋り続ける。

「まあ、そんなに痩せぎすだったら食べる所もないか。それとも釜の薪になりたいのかな？ほら、この辺の景色、懐かしいだろう？あの頃のあたいはしっこかったよねえ。まあ、赦しておくれよ。今じゃあの子も随分大人になったってもんだ。そういや結局アイツを懲らしめたのはあんただだったかな、それとも……」

火焰猫が陽気に一人語りを続けていると、いつの間にか死体の眼が微かに開いていた。骸は言葉を発することもなく、ただそのまま仰臥している。

「お、ようやくお目覚めだねっ。どうだい、久しぶりの地底は」

垂れ下がった目蓋から覗く眼球は、灰色に濁っていた。その視線は曖昧で、見えている

のかいなのかさえ定かではない。

「覚悟はしてたけど、どうせそのナリじゃ分かんないだろうね……あーあ、歳は取るもんじゃないねえ！ 人間だからしょうがないけど、あたいはちよっぴりガツカリだよ」

むくり。

煽るような言葉が癪に障ったのか、老婆は起き上がった。

火焰猫は反射的に身構える。彼女の弾幕の苛烈さは、それこそ自分の体がよく知っている。だが、老婆は力なく口を半開いているだけだ。殺気は感じられない。ましてや、唇から禍々しい詠唱が漏れることも。

「なんだい。言葉さえ忘れちゃったのかい。つまないねえ。お姉さんは強い死体だったと思っただけだよ」

火焰猫は落胆を隠さない。下手すれば弾幕戦になるかと心配していたくらいだったが、拍子抜けだった。多分、少しだけ期待していたのだろう。妖怪にとって年月は涵養だが、人間にとっては毒なのだ。

「まあいいや。とにかく、死体は持ってこいつで仰せつかつてるんだ」

ころころころと、再び火焰猫は猫車を転がし始めた。たった一人の積み荷だったが、何

やら普段よりも少々重い気がした。

歩みを進める内、次第に熱気が和らいでくる。灼熱地獄跡の上、いわゆる釜の蓋に戻ってきたのだ。薄暗い空洞をしばらく進めば、和洋折衷の巨大な建造物が見えてくる。地底の盟主が住む地霊殿だ。豪華なステンドグラスの張り込まれた扉と尊大な柱を前に、火焰猫は自慢気に胸を張った。

「ほうらお姉さん、立派だろう？ やっぱりエントランスの柱に括りつけるのがいいかい。それともお姉さんくらいの実績なら、応接室なんかもお勧めだよ。今なら」

そこまで話して火焰猫は、はたと真顔になった。

「……そう言えば、魂はどうしろって言われなかつたなあ」

火焰猫は、ただ単純に死体が好きなのではない。死体が器なら、魂魄は茶やワインのようなものだ。どのように魂魄を保持してきたかで、器の価値は決まる。当然、銘品と呼ばれるような死体なら、それなりの来歴があるものなのだ。この世界に、二つとして同じ死体は存在しない。

そういう意味では、火焰猫以上に命の素晴らしさを理解している者はいない。だから彼女は死体の扱い方が上手い。同時に、怨霊の扱い方も。

怨霊は未練の塊だが、見方を変えれば極めて純粹な存在だ。その純度の高さ故に、彼らは妖怪を憑り殺すことさえあるし、場合によつてはマジックアイテムのように結晶化することさえある。そしてその熱量は魂魄の在り方に大きく左右される。

即ち、今はすっかり呆けてしまったこの老婆も、かつての苛烈さを考えれば立派な怨霊ポテンシャルを秘めているということだ。

火焰猫の瞳孔が、遊び甲斐のあるおもちゃを見付けた時のように大きく見開かれる。暗がりの中で、猫目がキラキラ輝いた。その顔に浮かぶのは、満面の笑み。

「うん、やっぱりお姉さんみたいな魂は転生させるにはもったいない。ちゃんと器を燃やし尽くして、怨霊にしちまつた方がいい。そしたらこいし様やそのご友人とも、ずーっと遊べるってもんだ」

何処からともなく出てきた妖精たちが、こくこく無機質に同意の頷きを繰り返した。

「そうしよう！ なあに、遠慮なんて要らないよ。神社に住み着く悪霊だって居たそうじゃないか。死体はすぐカラカラになつちまうけど、怨霊はいつまでもピチピチだもんね！」

火焰猫はもう老婆の反応を確かめようとするらしい。素晴らしいアイデアに、またたびみたいに酔っているのだ。ついと一筋のよだれが落ちる。そうと決めれば単純な彼女

のこと、話は早い。もう一度地獄の釜へ向かうだけだ。猫車をきゅるりと旋回させて、勢い良く地面を蹴ろうとしたその時。

「違う」

しわがれ声が地底に小さく響いた。

不意をつかれた火焰猫は尻尾を震わせびよこんと飛び上がった。確かに、老婆の声だった。猫耳が大きく立てられる。また微かに老婆の口唇が動いた。喉が震えている。今度は間違いない。ぽつり、老婆の一言が絞り出される。

「ここには、空がない」

ああ、そりゃ地底だから当たり前だ。けれども、それが何だというのだろうか。死人に明るい空や、太陽は相応しくない。地の底や闇の裏こそが、怨霊の楽園なのだ。

「お姉さん、何言ってるんだい……？」

老婆は、再び沈黙してしまった。だが、その様子は先刻までと僅かに違う。目蓋の奥の濁った水晶が、今度はハッキリと前を向いている。

火焰猫はその変化を敏感に感じ取る。感じ取ってしまう。何故なら彼女は、死体の主だから。そして一度気付いたものを無視することは、好奇心の強い彼女にはとてもできない

ことだった。

「どうしたいんだい、お姉さん」

老婆は何も言わず、斜め上を指差した。そちらへ行けと。空を探せと、訴えかけるように。これはひよつとすると、ひよつとするのもかも知れない。

「……ちよつと寄り道してみよっか」

猫車は再び方向転換をした。眼前に迫っていた地霊殿を通り過ぎて、旧地獄の街道を上って行く。無言の老婆を押すのは、無力な赤子を乳母車で押すのに似ていた。

「ゆりかごから墓場まで、か。いまさら冗談にもならないねえ」

老婆は何も言わない。ただ、骨のような人差し指を掲げるだけだ。けれども今度はそれ以上、火焰猫も無駄口を叩かなかつた。

道半ば、古い都に微かに紫色の破片が舞っていた。ちらちら淡い光を孕みながら、静かに落ちていく。アメジストに似るそれは、地に沈んだ魂が結晶化した石桜だ。

そう言えば、あの時も石桜が降っていたな。

ふと火焰猫はそんなことを思い出す。随分と古い記憶だ。何も今、思い出す必要なんてないのに。

触れば溶けそうな泡花の下、静々と猫車は進む。淡く青く光りながら、老婆を載せて。

煙突みたいな洞穴を潜り抜けて、猫車はふわりと舞い上がった。

狭かった視界が全方位に広がる。夜明け前の幻想郷は、薄明を静かに湛えていた。東の空が滲む。深い森の黒、遠い山の端の向こうに、朝焼けが迫っている。

「ほら、空だよ。見えるかい」

荷台に座る老婆に火焰猫は囁いた。けれども老婆の口は半開きのままで。胡乱なその様子は、とても状況を理解しているようには見えなかった。それでもなお、老婆は何かを探すように、ゆつくりと世界を見渡した。そしてそぞろ気に手を揉んだかと思うと、ようやく呟いた。

「……飯は、飯はまだかい」

「なんだ、やつぱり分かんないのかい……まったく、人間つてのは」

火焰猫は淡々と言った。そのつもりだった。そのつもりだったのに、雑味が混じった。

「本当、人間つてのは、勝手なもんだよ。自分が思うがままに好きなこととして、終いにゃ誰かの在り方にまで喰いこんでさあ」

声に、次第に力が入る。そのことを彼女は自覚していない。いや、違う。自覚しないようにしている。知ると、歪んでしまうから。

「私らはね。すぐその気になっちゃうのさ。全くみつともない話だけど、容易くコロンといつちまうのさ。でも、そしたらあんたらはあっさり去っていく。私らはいっつも置いてけぼり。ああ、本当に勝手なもんだ。残された者はたまったもんじゃアない」

火焰猫は、自分のことを単純だと知っている。愚直かつ残酷でないと、自分たちの在り方が簡単に喪われてしまうのを知っている。それが妖怪の本質だからだ。人間は、ずるいのだ。とんでもない熱量を持っている癖に、すぐ移り気に風に溶けていってしまう。そうして、いつも妖怪を惑わせる。

老婆は、火焰猫の憤懣に応えることもなく、茫洋とした世界を見渡すばかり。

やりきれない。そんな思いを誤魔化すよう、火焰猫は朝靄の中をゆつくり回遊する。やがて山際から、陽の輝きが溢れだした。濃紺にしがみついていた星が、瞬く間に薄れていく。地底の時間が、終わる。

視界の端に、遠く小さく、博霊の神社が映る。チラと、境内で箒を振るう紅白の巫女装束が見えた気がした。

あそこにいた頃は楽しかった。だが、それも昔の話だ。

人を喰らう妖怪には、昏い地の底が相応しい。それは間違いない真実なのだ。何だか興が失せてしまった。帰ろう。死体だけでも持ち帰って、そしてさとり様とこいし様に褒めて貰おう。

火焰猫が空から降りようとした時、老婆が口を開いた。

「あいつは何処だ？」

意味が分からない。火焰猫は、もううんざりという体で応じる。それでも応じてしまうのが彼女の妙に律儀な所だ。

「あいつ？ 誰のことだい、お姉さん」

「あいつに決まってるじゃないか」

「だから、誰の……」

そこまで言い掛けて火焰猫は、老婆の目がすっかり据わっていることに気付いた。なんだかまずい。おかしなスイッチが入ってしまったようだ。先刻までとは別人みたいに力のある声で、老婆は問い掛ける。

「……言わせんなよ。霊夢だ。博麗の巫女、博麗霊夢は何処だって聞いてんだ」

その名は、火焰猫の胸をちくと刺した。火焰猫は想起する。縁側の暖かな陽溜りを。あの裏も表もない、どう転んでも怨霊にならなかつただろう、無邪気なだけの人間を。

博麗は既に幾度も代替わりした。博麗霊夢はもういない。魂は神社に祀り上げられたか、それとも何処ぞに転生したか。

そもそも、今の巫女だつてさぞかし老婆の死を悼んでいるはずだ。それこそ神葬祭で守護に加わつて貰おうとさえ考えているかも知れない。それなのに、未だに博麗霊夢にこだわっているこの女は何だというのか。

「……お姉さん、あんたの知つてる霊夢は、もうずっとずっと先に行つちまつたよ」

「畜生、またか！ あいつはいつだつてそうだ！」

火焰猫の言葉を聞いた途端、老婆は拳を握り締め、どすりと猫車の端に叩き付けた。骸の乾いた表皮が、剥がれて散る。

「お姉さんお姉さん、体は大事にしておくれよお」

骸を傷つけてはお叱りを受ける。火焰猫は焦つて懇願した。けれども死人に耳なし、老婆は全く聞く気がない。

「こうしちやおられん、とつとと追い掛けるぞ」

死体は強く主張した。あろうことか、死霊の長に命令をした。哀れな長は混乱して憤慨して嘆息した。

ああ、最後までなんて我が儘な人間なんだ。しかも愚かだ。地獄より底なしで氷精より極め付けの馬鹿だ。あんたが最後まで巫女に敵わなかったことは、あんた自身が一番知っていただろうに。

猫は困り果てた顔で声を絞り出す。

「それはちよつとね……できない相談かな……」

「何言つてんだ。なせばなる。跳べば、翔べる!」

ついに婆さんは立ち上がって騒ぎ始めた。無茶苦茶だ。どす黒く鬱血した足で地団駄を踏み、枯れ木みたいな腕を振り回して火焰猫に掴み掛かってきた。ピリピリと皮膚が裂ける音がする。

「アイタタ、やめておくれよ! 猫を殺すと、九生祟るんだからね!」

火焰猫は細首を絞められそうになり必死で抵抗する。慌てて老婆の指を引き離すと、おまけに二、三枚剥げた爪がついてきた。

「ああもう、勘弁しておくれよお」

だがそんな些末事に構わず、老婆は両手で猫車を叩きながら何やら演説を始めた。何処から出ているのか分からぬ大声で叫んでいる。

「おい、飛べ！ 飛ぶんだ！ 急げ、約束したんだ！ 今なら間に合う。間に合うんだ！」
火焰猫は四つの耳を疑いながら、老婆の言葉を反芻した。

飛ぶ？ 約束？ 間に合う？ 間に合うだと？ そもそも何に？

「ハリーアアアップ！ 遅すぎるってことは絶対じゃない！ あいつに追い付くんだ！ 急げ！ 私を信じろ！」

まさか。やっぱり。バカだ。狂人だ。いや、狂死体だ。信じられるわけがない。

けれども落ち窪み濁っていたはずの老婆の眼は、今や青く爛々と耀いていた。器に残る魂魄が暴走しているのだ。こいつは酷い死体を運んでしまったと、火焰猫は後悔した。こいし様恨みますよ、とこっそり呟いた。

「何やってんだ！ 早くこいつを使え！ こいつさえあれば何処までも——夢の彼方にまでだって、翔べる！」

そう嘯きながら、彼女は懐から小さな塊を取り出した。千々にひび割れ、それでも丹念に繕われ、堅く艶やかに再結晶した、八角のあかがねを。

今や伝説と化したその魔導具の存在感に、火焰猫は圧倒された。姿を消して恐る恐る見守っていた妖精たちも、真つ白な顔を突き出した。みるみるうちにその表情が畏敬に染まる。そして妖精は、熱狂と共に叫び始めた。

「八卦炉!! 八卦炉!! 八卦炉!!」

大した自我を持たない、単細胞な妖精の記憶にさえ刻み込まれているのだ。この魔導具がとんでもなく傲慢に、暴力的に切り開いてきた光道のこと。例えルーツが何であろうとも、それは最早誰のものでもない、この老婆だけの道だった。

火焰猫は俯いた。数度頭を振り、深く胸郭を膨らませた。そして火車として溜め込んだ年月を吐き出すように長い長い溜息をついた。分かっていたことだった。それを確認したかっただけなんだと、自分自身に説明した。

あたいは最後に一つ、悪党に騙されちゃったんだ。人間は本当、信用ならない輩だからね。こいし様だつて仕方ないと赦して下さるだろう。それに、たまにはあのサボリ屋にだつて、仕事をやらさないよ。

火焰猫は、ゆるりと顔を上げる。しばしの沈黙を経て、老婆に向き直る。

「お姉さん、いいんだね。もう二度と戻って来れないよ」

「馬鹿、戻ろうと思ったことなんて、一度たりともあるものか。これまでも、何度でも、何周遅れでも、追いついてきたんだ！」

よくもいけしやあしやあと言う。やっぱりこの死体は、何も状況が分かっちゃいない。自分の死にさえロクに気付いちゃいないんだ。けれども、だからこそ火焰猫は零れる笑みを抑え切れなかった。

「……ああ、やっぱりお姉さんは相変わらずの大嘘つきだ。コソ泥の中途半端の弱虫だ」「おい、ひどいなお隣。私を誰だと思ってる」

懐かしい呼び名に、火焰猫はひくと体を震わせた。

そう。それだよ。あたいはそう呼ばれるのが好きなんだ。もつと名前を呼んどくれ。あたいの名前を呼んどくれ。

老婆は荷台に立っている。仁王立ちで、一言ずつ、詠唱を絞り出す。

「私は」

白黒装束が風にはためく。そこで遙かを見据えるのは。不敵に口角を吊り上げるのは。

「普通の魔法使い」

高らかに腕が突き上げられる。固まりかけていた関節が外れ、鈍い音を立てた。

「霧雨、魔理沙だぜ」

ごくりと火焰猫は舌舐めずりした。

ああ、ああ、なんて美味しそうな魂なんだろう。そうだよ、こうじゃないと。やつぱり人間は最高だ。お姉さん、また会えるといいなあ。その時は必ずあたいの獲物だ。

「わかった。わかったよお姉さん。あんたがいくつて言うんなら、十年に一度の特別だ。ここは一つ、明るくいこう！」

火焰猫のその声を最後まで聴こうともせず、老婆は右手を振りかぶり、そのまま八卦炉を猫車の後方に叩きつけた。魔導具がやすやすと車体に突き刺さる。

「ふにゃーん!!」

火焰猫は尻尾を伸ばし、高く絶頂の声を上げた。歓喜に打ち震えつつ猫車のハンドルを思い切り握り締める。呼応して荷台が様相を変え、大きく膨らんで老婆と火焰猫を固定した。すかさずゾンビフェアリーたちが箱乗りに飛び移り、リズムカルに車体を叩き始める。ぶるんと重低音が大気を揺るがせたかと思うと、盛大に紅いバツクファイアが弾けた。もう動かない死体の心臓の代わりに、車が歓喜のビートを刻んでいる。火焰猫は新たな旅立ちを宣言した。

八卦炉がぶわりと焰を噴き上げる。

熱い。熱い。地獄の釜より遙かに熱い。燃え滾る恒星が、此処にある。壮絶な勢いで猫車の車輪が空転し、次の刹那、あらゆる物理法則を引き千切りながらロケットの如く加速した。

その朝、空、涯ては無く。どこまでも青。

火焰猫は見た。老婆の体が、空の色を映しているのを。違う、彼女自身の体が青い炎で煌やいているのを。それは、魂が燃える色だ。命が燃え、尽きぬ加速度で我が身すら忘れ去っていく色だ。

炎の道が天に走る。速度が上がるにつれ、魔法使いの体軀はひび割れ、皮膚が剥落した。指は折れ、足は曲がり、削げた肉からは青炎がより一層眩く溢れ出した。星の器が砕けていく。それでも彼女は止まろうとしない。止まることなんて、できない。

ああ、お姉さん。あんた全部燃やし尽くしちゃうんだ。最後の最後まで燃え尽きちゃうんだね。

妖精たちはとうに振り落とされた。火焰猫も車を撓ませ自らを包み込むので精一杯。それも今に摩擦熱で溶けてしまいそうだ。

「ちよつ、ちよつちよつ、あたいを道連れにするのはやめておくれよお！」

止め処なく世界は加速する。青は溶け、光子は閃き、風は遠く後ろに在る。

刹那、無音。

その時、火焰猫は聴いた。確かに聴いた。微笑む彼女が、霧雨魔理沙が、幻想郷を睥睨しながらlipstick呟く一言を。

「綺麗だ。本当に綺麗だ」

また、八卦炉が豪炎を噴いた。未だ何かを追い掛けるように。全てを置き去りにして。

+++++

あの日、幻想郷の住人は皆、東から西へと飛び去る光を見たんだ。流れ星だったと言う奴もいたし、UFOだったと言う奴もいた。また別の奴は、青空に響き渡る猫の声を聞いた。嬌声みたいな、悲鳴みたいな、にゃーんと鳴く声を。

あんまり光が目映いから、すわ異変かと当代の巫女が追い掛けた。けれども、流石の巫女も追い付くことはできなかった。いや、例え誰の手でも届かなかったらどうなるな。

光が何処へ行ったのかは、誰にも分からなかった。

ただ、夜毎に空を眺める一人の夢想家だけが気付いたらしい。

新しく夜空を廻る、小さな星屑に。

そら、今流れた光がそれだ。

幻想物語寄稿集

GENSOU 'ROMAN' KIKOU - SHU

標

原曲
著

伝説のユグドラシル
みずなみ



初めて見るそれは、御伽話もかくやと言わんばかりに壮大であった。

今にも倒れて降つてきそうなほどに大きい。しかし、その重厚さを見れば、鬼が押しつてもびくともしないくらい頑健であることが容易に推し量れる。時折吹く風を受けて、ごうごう、と音を立てる様にすら、異様な迫力がある。

それでいて、周囲には妖精たちが舞い踊り、何匹かは楽器を吹いて暢気な音を奏でていく。途轍もなく巨大で雄大なそれを見上げながら、私は、ほう、とため息をついた。

世俗の騒ぎを下に聞く妖怪の山に、一本の樹が生えた。そう聞いたのはつい先日、天界にて例の如く遊惰と怠惰を貪っていた時のことだった。

只の樹木ではない。この樹の常ならぬ点は、尋常でなく大きいことである。ともすれば、雲海を貫いて天界に届くかもしれぬ。風の噂はそのように言っていた。面白いと思つた私は、天人にあるまじき行動力で機を見計らい下界へと降りて行つた。雲の群を抜けるとすぐ、山の頂の程近くにそれが見えた。遠距離からでも目に入るその樹の前に降り立つてみると、見上げて見上げ足りなくらいに大きい。

太い幹が天を衝くように伸び、無数に分岐した枝から葉が青々と茂っている。まるで山全体を見下すかのような姿は、物語に出てくる入道を思わせる。私は樹の全容を視界に収めようとして、ぐぐい、と腰に手を当て仰け反るようにして視線を上げてみた。

——そんな見上げ方では、首が痛くはなりませんか。

天人さん、と呼ぶ少女の声が背後から聞こえた。振り返れば、背に黒翼を生やした烏天狗が人懐っこい笑みを浮かべていた。

——清く正しい幻想文屋、射命丸文でございます。

彼女に会ったのはいつ以来であろうか。近頃下界には降りてこなかったし、天界に居ると時間の感覚が失せてくる。推定すれば、ざっと数百年ぶりというところだろうか。

文の出で立ちはかつての洋風な新聞記者のものではなく、天狗独特の装束——それも、おそらくは相応に格式の高い礼服——であった。しばらく見ないうちに上役へと押し上げ

られたのであろう。結構なことだと思ふ反面、停滞していると思つていた時間が思いの外に動いていたことは私にとつて驚きだった。

しかしながら、この烏天狗の笑みは何時まで経つても変わらない。漆黒の羽織に身を包みながらも、纏う雰囲気は私の知る射命丸文そのものだ。

——久しぶり。お変わりないようで、重畳だわ。

——それは、お互い様ですね。

端的に言えば、「変わらない」ということを私は文に見出して、おそらくは文も私に見出した。久方ぶりに降りてきた下界に私の知る者が未だあることは、私にとつて驚きであり、安心でもあった。

とりわけ、この樹の前では。そんなことを思いながら、再び樹を見上げてみる。

——長いこと幻想郷に居ると、こんな荒唐無稽な事にも遭うものね。

——荒唐無稽、この樹を言うのにぴったりという言葉です。頂いておきます。

文は懐から取り出した手帖に短く書きつけた。

——天狗さんは、この樹のことをさぞかし良く御存じなんでしょうね。

——文々。新聞の看板は、まだ降ろしておりませんよ。

それから、文はこの樹のことを話し始めた。

曰く、偶然が積み重なった結果であるらしい。僅かな確率事象を幾つもくぐり抜けてきた結果である。

外の世界の樹の種が、たまたま妖怪の山に流れ着く。無事に芽吹くことができたら、次は若木へと育ち始める。風雨や虫鳥の被害を運良く免れると、やがて山の妖精に見つけられる。そして、沢山の妖精に代わる代わる見守られ、樹は見る間に急成長を遂げる。齢数十かで見紛うほどにまで育つ頃には、成長もますます速くなり、あれよと言う間に誰も見

たことが無いほどの大樹へと成長した。大樹となるべき至適条件が偶然にも十重二十重と重なってこのような樹が生えた、と言い表すより他ないだろう。

未曾有の珍事に山の神も妖怪も慌てふためいた。突如として現れた大樹は幻想郷に暫く無かった「異変」と見なされ、博麗の巫女が馳せ参じる事態となった。しかし、当然のことながら異変の首謀者は見つからず、当の樹自体が無害であることが判明した。偶然がもたらした自然現象なのだから仕方ない。全くの無駄足だった、と巫女はうんざりして帰って行った。それ以来皆も警戒を解き、今では樹を育て上げた妖精が集まって遊んでいるのだと言う。

河童が太陽光発電のための日照権を主張した以外に目立った騒動も起きなかった。山の神も天狗もこの大樹を放置しているらしい。例に漏れない平和な話である。拳句の果てに、巫女に連れられて御阿礼の子まで来たそうだ。先代も見たことのない樹を縁起に残すのだと息巻いて筆を走らせていたという。常盤木にも似た広い葉の形をしながらも、唐松のような樹肌で、棕櫚のように小さな花を房状につける。これまでに見たことのない大きさと姿をしているから、この樹にも新たな名を付けねばならない。そう言っ御阿礼の子は、記憶の奥底から外の世界の大樹の名を引っ張り出した。

——「ユグドラシル」。伝説の大樹を、かの国ではそう呼ぶのだそうです。

いやはや、妖怪の山だというのに人間が易々と踏み入ってきて、樹の命名までしてしまふなんて、見逃す我々も暢気なものです、と、文は苦笑する。

——巫女が暢気だと、皆が影響されるのよ。

——奇遇ですね、私もそう思います。ここ最近の幻想郷が暢気なものも、きっと博麗の巫女のせいでしょう。

当代も、いつぞやに負けず劣らず御目出度いですから。明後日の方を向いて文は付け足した。

私は、文の言う「いつぞや」を思い返す。在りし日の風景は、果たしてどのようであったか。思い出そうとしても中々上手くいかない。山から、あるいは天界から、幻想郷を見晴らした時の光景は、今も昔も同じような気がするし、そうでない気もする。

ただ一つ言えるのは、かつての風景が少しずつ変化して、今の風景があるのは間違い無い、ということだ。

思えば、遠くへ来たものだ。気怠い天界を抜け出したあの日から、奇想天外なユグドラシルに出会うまで、自らの気付かぬ内に随分と長い時間を過ごしてしまった。これだけの時を隔てれば、一日や一年で生じる変化が無数に積み重なるのだろう。きつと、今の風景は、かつてと似ているようでいて、その本質が全く変わってしまったているのだろう。

大樹と反対の方向、人里の方をおもむろに見遣る。すると不意に、今私の目に見えている光景の裏に、遙か遠くへ過ぎ去った光景が見えた気がした。

私は、目を瞑って空を向き、深く息を吸う。そして、大きく吐き出す。
本当に、やれやれ、である。

——似ているというだけで錯覚をするのでは、たまったものじゃないわ。

——どうかなさったのですか。

——昼間から変なものが見えた。あなたのせいよ。

——私にも常ならぬものが見えたのですが、ならばきつと、これはあなたのせいですね。お互いに顔を見合わせると、どちらからとも無く笑いが込み上げてくる。

——長生きすると、暈^まけてくるわね。

——まったく、困ったものです。

傍の文は、くすり、と笑った。そして、それきり何も言うことなく、眉尻を下げて静かに微笑んだ。

この暢気な樹の下で、もう少しだけ話がしたい。そう思った。

二度目に見るそれは、一度目と変わりない偉容で私を迎えた。

晩夏、妖怪の山の中腹辺り、険しい森林地帯を木肌と岩肌を縫うようにして駆ける。逃げる私を哨戒の白狼天狗が追い縋り、太刀を浴びせてくる。それを軽くないなし、足を止め緋想の剣で返刀を見舞う。

——山を侵す者よ！ 名乗り給え！

刃のぶつかり合う甲高い音の最中に、劍先より鋭い白狼の怒声が響いた。このまま白狼の御稽古ひまつぶしに付き合うのも吝かではないが、無闇に事を荒立てても厄介だ。相手の要求へ素直に答える。

——射命丸文の知り合いよ。

瞬間、は、と動きを止めた白狼の懐へと間合いを詰め、振り被った緋想の剣を彼女の眼

前で止めた。頭髮より白くなった顔を引き攣らせながら、それでも白狼は落ち着き払った声で言った。

——棟梁様の旧名よ。なを御存じとは、無礼を御許してください。

——気にしないわ。

彼女の顔を覗き込む。知り合いかと思えば、そうではなかった。鋭い三白眼に端正な顔立ち。以前に手合わせした白狼とよく似ているが、どうやら別人だ。気になったので尋ねてみる。

——あなたは、犬走という白狼天狗を知っているかしら。

——私こそ、犬走の白狼でございます。

——私は犬走椛という名の白狼を知っている。あなたは彼女と酷く似ている。

——椛は先代の犬走と伝え聞いております。

白狼は跪いて頭を下げた。要するに、この白狼は犬走椛の後代であるのか。私は独り合点した。私の知らぬ間に時間は矢のように飛んでいく。時間に合わせて、物も命も移り変わっていく。いま目の前に見えているのはそういうものの一部だ。しばしば忘れそうになることを、いつ以来かぶりに思い出した。

先導をする、と言った彼女の後に付いて、山間の道をしばらく進む。目の前の背中は、所々が土埃で汚れた装束に包まれ、白い髪の上には少し大きめの朱の兜巾が載っていた。細い少女の形のはずなのに、心なしか背中が広く見える。かつての犬走と瓜二つと言い表すのに相応しい。

黙々と歩を進める姿は、彼女が犬走であることの証左だ。私は、思わず笑みをこぼしかけて、慌てて口元を抑えた。

そして、それとほぼ同時に、前の背中がぼつりと言った。

——棟梁様は。

——知っているわ。里に下りているのでしょう。

おそらくは式事か何か、天狗の長としての役目を果たすために、であろう。

——あんまり仕事に追われてるのは、あいつらしくないんじゃないかしら。

——棟梁様は、きちんと御自身の務めを果たしておられます。仕事に追い回されることはあっても、仕事に押しつぶされることは無いでしょう。

そう語る彼女の背中が、どことなく誇らしげである。

——文のこと、よく知っているのね。

——棟梁様は、どの天狗よりも活動的で、どの天狗よりも広い世界をお持ちですから。我々のような下の者共のことも良く見ていてくださいますし、それゆえに我々も棟梁様のことを色々と存じております。

ちらり、と振り向いた彼女の瞳は憧憬の色に輝いていた。こんな後輩のためにも頑張るなさいよ、と、心の中で何処ぞの棟梁様へと呟いた。

もう少しだけ歩みを進めた先、かつて九天の滝があつたあたりに、いつぞや見かけた大樹が佇立していた。前の樹は倒れ土に還り、また別の種が芽吹いてユグドラシルとなつたのだ。他の場所には生えない大樹が、妖怪の山に二度。山とは、とりわけ樹が生えるのに適当な場所であるのかもしれない。

樹の真ん前に白狼と並び立つ。白狼は既に見慣れているのか、殊更に驚嘆することはない。しかし、厳かな表情で見上げている。私も、樹に気押されることはない。この樹を見

るのは初めてであるが、かつて同じ樹を見たからである。形も大きさも、前と似ている。異なるのは、夏の終わりにあつて葉が色付き始めていることくらいであろう。

——この樹を、以前にも見たことがあるわ。あなた達の棟梁様がまだ棟梁になる前、一緒に、山の頂の方に立っていた大樹を、こんな風にして見上げたのよ。

——昔の棟梁様と、一緒に。

回想する私の隣で、白狼は嘔み締めるように呟いた。

——そうよ。私も、きつと文も、その時からあまり変わってないけれどね。

——私には、想像も付きません。

白狼はひとつ小さく嘆息した。

——遙か昔、おそらくは、私の先代が居た頃のことなのでしょう。

やはり、私には想像も付きません、と呟いて、白狼は目を閉じて首を垂れた。

——己の寿命の外のことに想像を巡らすのは、どうにも得手ではありません。宛ら、空そらに浮いている雲に手を伸ばすようです。そこに在るといふ事実を知っていても、手で触れることはできない。私には、遠すぎるのです。

だからこそ、と、白狼は続ける。

——私は、私よりも長く生きる方々を敬わずには居れません。過去にこの大樹を見たことがあるというのは、私のような凡百からすれば、雲を掴むような途方も無い話です。そのような方々を、私は畏れずには居れないのです。

そう言つて私に視線を向ける白狼の目を見て、私は自身が決定的な誤解をしていること

に気付いた。この白狼は、どれほど似ていると言えど、かつての白狼とは異なるのだ。最初のユグドラシルを見た頃の犬走は既に居らず、今の犬走とは別の者なのだ。

——少々過ぎたことを申しました。申し訳ありません。

——いいえ。こちらこそ、あなた達のことを誤解していたわ。

私の答える声は少し掠れていたかもしれない。再び大樹を見上げながら、頭の中で思考が渦巻き始める。

果たして、一本目のユグドラシルが生まれるまでに、あるいは一本目の後に二本目のユグドラシルが生まれるまでに、どれほど多くの者たちが移り変わったというのだろう。

語るだけ語った白狼はそれきり何も言わず、私は悠然と構える大樹の前で立ち尽くした。

幾度目かに見るそれは、秋に差しかかる妖怪の山で、黄金色に輝いていた。

春夏秋冬、どの季節のユグドラシルも、何度も見てきた。しかし、この妖怪の山にあって、秋より見事な光景を見せる時は他にないだろう。

不思議なことに、ユグドラシルは何度見ても驚きがある。樹自体の非常さが驚嘆に値するという以上に、長い時を経てもなお、何度も同じ姿を見せてくれるからなのだろうと思う。

再びやってきた妖怪の山も大きく様変わりした。

とうとう全ての妖怪が移り変わった。

天狗の長となった射命丸文も例外ではなかった。

犬走も、また新しいのが出てきた。他の天狗も何代か交代した。

何遍も大樹が生え、数多くの天狗たちと大樹の下で会った。

そうして、私の知っている者たちは、みんな居なくなってしまった。

妖怪の山の外も例外ではない。気がつけば、長命な者たちも含めてみな全て、どこかへ

いつてしまった。

なぜ私だけ生き残っているのだろう。

そんな疑問を私が抱いていることも知らずに、目の前の烏天狗は人懐っこい笑みを浮かべていた。

——天人さんは、何やら難しいことをお考えのようですね。

——天の人の方が天の狗より上等だからかしらね。

——失礼な。

彼女は、ぶくう、と頬を膨らみます。大妖怪である烏天狗に似つかない軽佻な仕草も、どことなくかつての烏天狗を彷彿とさせる。白いブラウスに黒のスカート、朱の兜巾と高い一本歯下駄。出で立ちまでもが良く似ている。

私は再び大樹を見上げる。樹の全体が見えるよう、ぐぐい、と仰け反ってみる。

——そんな見上げ方では、首が痛くはなりませんか。

そう言って微笑む彼女を、凶らずも懐かしいと思ってしまう。

彼女ではない別の彼女を、無意識に重ねて見ってしまう。

しかし、それは違う。彼女は彼女だ。齢数百にも満たぬ新米の烏天狗である。私は頭に残る残像を振り払って、彼女の顔を見る。

——この見上げ方がいいのよ。あなたもやってみたら。

——長生きすると頭がどうにかなくなってしまふのでしょうか。恐ろしいことです。

——あなたが一緒にやってくれたら嬉しいな。ほら、やってみてよ。

——嫌です。丁重にお断りします。

——そう。ずうつと後になってから後悔するよ。

——やはり天人さんの考えることは、良く解りません。

困ったような笑みを見せて、それでは、と彼女は飛び立っていった。

私は、一人でユグドラシルを見上げる。

遠い昔に、何度も、こうして見上げてきた。

傍らに誰かがいる時もあれば、居ない時もあつた。

葉が青く茂る時もあれば、枯れて葉を落とす時もあつた。

目を閉じれば、これまでに見てきた樹のいずれもが臉の裏に蘇る。

焼き付いた光景のひとつひとつが、目を開いた先の大樹に重なって見える。

それほど、私はユグドラシルを何度も見上げてきたのだと、今さらのように思い知る。

例えるならば、時計の秒針が一回りすれば一分で、短針が回れば一時間、長針が回れば

十二時間である。陽が昇り、次に陽が昇れば一日で、月が満ちて欠ければ一月。寒暖を越えれば一年で、六十年経てば幻想郷は蘇生する。

そうであるならば、このユグドラシルすらも、精確ではなくとも、時を測る単位となりえるのではないだろうか。

私達が過ごす時間は、各々の単位によって巻き取られていく。そうして、巻き取った時間を重ねて、繰り返す。日々を繰り返し、年月を繰り返し、幻想郷の一廻りも繰り返す。そうやって、同じような、けれども異なる時間を何度も何度も重ねることで、世界は螺旋を描くようにして進んでいくのだろう。

そして、と、私は目の前の大樹を見上げる。

私の知るどの暦よりも永い期間において姿を現わすこの樹は、いったいどんな時を切り取るのだろうか。

最初に樹が生えるまでに、多くのものが移り変わった。

次に樹が生えるまで、さらに多くのものが移り変わった。

変わらないと思ったものたちも、少しずつ、しかし確実に、変わって行ってしまった。

みんな、移り変わってしまった。

けれど、それでも。

変わらずにあり続けるものがある。きっと、そうなのではないか。

どれほど世界が廻ろうと、日は昇り、星は輝く。

世界の上で生きる者たちが移り変わろうと、それ自身は、移り変わらない。

きっと、そうなのではないか。

いや、そうであってほしい。

私は信じたい。変わらずにあり続けるものの存在を。

私の命を懸けて、幻想郷このせかいに生き続けよう。生き続けることで、私はそれを見ることができなのだ。前の樹ユグドラシルから次の樹ユグドラシルへと進む間に、多くのものが移ろった。時を重ねることに、殆ど全てほとんどのものが移ろった。けれど、どれほどユグドラシルを繰り返そうと、うつろわざるものは存在する。それを、この目で確かめたい。

目の前の大樹は、ただ悠然とその偉容を湛えている。秋口の妖怪の山にあり、周りの紅葉に合わせて、大樹の葉も黄金に色づき、はらはら、と舞い落ちていく。折り重なった落葉の絨毯の上を、そつと歩いてみる。樹の上で妖精たちが奏でる暢気な音に合わせて、かさり、かさり、と落葉の音が鳴る。

こうして、一歩ずつ、私は歩いて行くのだろう。私の目指す終末へと向けて。

遙か遠くの標ユグドラシルをたよりに。





あとがき

凋叶棕は『物語音楽サークル』であると、私は思います。

そも、物語音楽という言葉自体に馴染みの無い方も居られるでしょう。言葉の語源や提唱者は定かではないようですが、現在では一般的に、その名の通り「音楽」だけではなくそこに「物語」が在るものが、とりわけそう呼ばれています。そして物語音楽は大抵の場合、シングルないしアルバム1枚の単位で“作品”と成るよう創られています。

では、どこからが物語音楽であるのか。何を持ってして、物語が在る、とするのか。その線引き、解釈は人によって異なり、一定の基準はありません。

が、一つ確かに言えるのは、私にとつての凋叶棕は、ドンピシャでドストライクな物語音楽を創るサークルだ、ということです。

物語の場面や感情に寄り添うのが音楽であれば、物語の文章は音楽のメロディやリズムを活かす歌詞でなくてはなりません。それは小説や脚本のような文章ではなく、詩の文法に寄るものになるでしょう。そしてそれはどうしても、抽象的で行間の多いものになります。そうになると、物語としては説明不十分にもなりかねません。

説明臭くなり過ぎる歌詞は良くない。かといって音楽を立てすぎると物語が伝わらない。このバランスは難しく、様々なクリエイターが、様々なアプローチを試みています。CD内で説明する曲とそうでないものを切り分ける、ブックレットに小説を載せる、漫画等の他メディアを活用する、歌う言葉よりも多くの情報を歌詞として視覚的に表記する……等、どれも一長一短あり正解は決められません。

この点、凋叶棕には強みがあるとと思いませんか。何故ならそれは、東方二次創作だから。リスナーみんなが心の中に幻想郷を持つ限り、音楽に寄りつつも、決して物語が疎かになることはなく、それどころか扱う東方の原曲そのものがどれも各個に物語を持っているから、相乗効果でより高みへ昇ってゆける。そこにイラストがばっちり嵌れば、三位一体。それぞれの持つ意味が複雑に絡み合い、無限の可能性を生みます。

凋叶棕はその総合的な幻想力の高さが半端でなく、聴く者として「読み甲斐」がこんなにもある物語音楽はそうそう無いぞと、出逢いの奇跡に感謝するばかりです。

そんな素晴らしい物語音楽を、聴いて、読み解いて、解釈して、語らう。それが出来るだけでももちろん素敵なんです、その解釈の副産物として生まれる新たな物語を形にしたい、というのが、この合同誌を作ろうとした最初の想いでした。

そんな合同誌に、急な呼びかけにも関わらず参加を快諾して下さった心優しい皆様から、それぞれコメントを頂いております。（順不同、敬称略）

紗倉澤（表紙イラスト・扉ページデザイン）

凋叶棕さん小説合同誌、発行おめでとございます！ 右を見ても左を見ても凋叶棕まみれという素晴らしい企画にこのような形で参加させていただき感無量です…!!

自分で創作をするならげんきになったときのうたですかね！ アップテンポでキャッチーな曲の多い屠大好きです！ ありがとございましたー!!

卯月秋千 (Arithas ne lves)

凋叶棕楽曲の素晴らしさは語るまでもないのですが、自分で書いてみると東方キャラクターがどんどん好きになれるのが最高ですね。お燐は本当にかわいい。

副題を「Fey road」にする案がありました。謝罪します。凋叶棕が、私の中のなんか悪いのを刺激するんです。全部アスタリスクの夢です。

<八卦炉を讚えよ!!

桶住人の mist (幻想の旅人)

桶住人の mist だったものです。まずは各位に最大限の感謝を。『諭』の特設を拝見・拝聴し、完全に殺されてしまうことを確信してしまったので、後書きの場をお借りして遺言とさせていただきます。いつしか夢を無くした私達の行く先に対してトンデモアンサーをぶつつけたいと思いき書き上げておりました。ほんの少しの幻想を手練り寄せようとしたしまし
 たが、偽りの幻に踊らされていたようです。願わくは、読んでくださった皆様の航路に幸
 あらんことを。

満足ひろ pon (ベリーブ・ガールズ)

初めまして、ひろ pon です。素敵な合同に参加できたことを嬉しく思います。

今回、早苗と魔理沙の二人に焦点をあてさせて頂きました。凋叶棕さんの作品における二人のひたむきさや強さ、または弱さ。そんな輝きを三次創作として伝えられれば幸いです。凋叶棕さんは私にとって様々な「出会い」をもたらしてくれたサークルであります。そのことに感謝し、また更なる出会いに心を躍らせています。皆様にも、よき幻想との出会いがあらんことを。

みずなみ（標）

この度は素敵な合同企画にお誘いいただき、ありがとうございました。

わたしが凋叶棕のインスタ作品を聴いて「歌詞が無くてもこれほどの奥行きが生まれるのか」と舌を巻いたのは、『伝説のユグドラシル』が最初でした。ゆったりとした遙な時間の流れを思うと、気が遠くなるようでもあり同時に安心するようでもあります。

皆さんは何を感じ何を思われるでしょうか。機会があればお尋ねしたいものです。

拙作について（お読み頂いている前提で）ちよつと語っておきますと、原曲はマッドパーティーなのに中身どう見てもアレやんけ！と思われた方も居らっしゃるかとは存じますが、ええ、その通りでございますよ（開き直り）。

まあ、そっちを原曲表記に書くことネタバレになるから……という理由が大きいですが、いいんです。原曲、つまり原作となる表の物語は、マッドパーティーに相違無いんです。

その辺、書き終わってみると他にも数曲からの物語を込められたなと思うので、我ながらですが意外と上手く嵌ったんじゃないかと思えます。

……まあ、実は元よりそこまで綺麗に繋がるように設計されて、今なお全てはRD氏

の掌の上なのかもしれないが。

示し合わせた訳でも何でもないので、皆さんの作品はちょうど良く原作CDが別れていて、かつ実に色々な物語が融合していてすごいなあと思っています。このモチーフはアレだ、ここはあの物語で解釈が出来る、など、いわゆる“隠し原曲”を探してみるのもまた、凋叶棕的で良いかもしれません。

最後になりますが、明るく美しく時には悲しく、幻想少女のことがもっと好きに、ひいては幻想郷そのものももっと大好きになる素晴らしい物語音楽を驚くべきペースで次々と生み出し続ける凋叶棕主宰のRD氏と、美麗で可愛くて斬新でいつも驚かされて、その尊さに思わず深い溜息が出ることばかりのイラスト&デザインワークのはなだひょう氏に、最大級の賛辞と感謝を。

そして何よりも、幻想郷の生みの親・ZUN氏に敬意を。
ここまでお読み下さり、有難うございました。

はーしえん

奥 付

書名	幻想物語寄稿集	
発行	青雲アステロイド	
文・編	はーしえん	Twitter: hashen_nb
寄稿	卯月 秋千 (相乗り回転ブランコ)	Twitter: puzukith
	桶住人のmist (mistypail)	Twitter: mist_ok
	満足ひろpon (柑橘サイコロジウム)	Twitter: mnzk_pon
	みずなみ (水彩みかん)	Twitter: mizunami_tr9
絵	紗倉 濤 (conica)	HP: http://conica.sakura.ne.jp/
深謝	RD (凋叶棕)	
	はなだひょう (ホシニセ)	
発行日	2015年8月14日	コミックマーケット88 (初版)
	2016年5月8日	第十三回 博麗神社例大祭 (第二版)
	2019年5月10日	WEB公開
印刷	株式会社 緑陽社	
原作	上海アリス幻楽団	HP: http://www.l6.big.or.jp/~zun/
	凋叶棕	HP: http://www.rd-sounds.com/

※本書は上海アリス幻楽団様の著作である『東方Project』の世界観を元にし、

凋叶棕様の楽曲を原作として制作した同人作品です。

※表紙、文章、その他の無断転載、複製等を禁じます。

※乱丁、落丁本については depots2nd@hotmail.com まで御連絡下さい。

収録作品

『3度目のマッドパーティー』

writer: はーしえん
♪マッドパーティー

『ビリーブ・ガールズ』

writer: 満足ひろpon
♪風神「ブレイブ・ガール」

『幻想の旅人』

writer: 桶住人のmist
♪ロストドリーム・ジェネレーションズ

『A girl has nine lives』

writer: 卯月秋千
♪from the corpse to the journey

『標』

writer: みずなみ
♪伝説のユゲドラシル

同

人音楽サークル【凋叶棕】のRD氏が、旋律と音色、そして詩で紡いできた数々の物語音楽。これは、氏の《幻想郷》に誘われた5人の作家による綺譚である。新たな解釈、異なる視点。《幻想》とは一体何なのか。その《二つの解答》が此処に有る。

或る者は、物語に寄り添って。また或る者は、物語の隙間を埋めるように。そしてまた或る者は、物語同士を組み合わせて。物語と音楽が掛け合わされて、《幻想郷》の可能性は《この大空》のように、無限大。

幻想の羽を広げ

これが 私達 が描いた《幻想物語寄稿集》!